「馬込文士村資産化事業」研究報告

── ３年間の活動を終えて ──

Study Reports on “Project for Arranging and Recording Documents and Material of the Writers in Magome-bunshi-mura（Magome writer village）”

— Three Years of Research and its Bearing —

髙　瀬　真理子
日本語コミュニケーション学科教授
能　地　克　宜[1)]
山　口　みなみ[2)]
田　嶋　彩　香[2)]
祖母井　千　秋[3)]

抄録：

馬込文士村に関わる資料整理を終えて、概説、時代背景から、文士の生活や彼らの人間関係、時代との向き合い方、主たる文士に焦点を当てたものや再評価すべき文士（特に吉田甲子太郎）のことなどを５人の筆者がそれぞれにテーマを設けて考察し、報告している。

Summary：

The five researchers, finished their survey of the documents and material concerning the writers in Magome-bunshi-mura, report on several issues: an outline of the village, its historical background, the writers’ lives and their association with each other, their attitude toward the era they lived, and Kinetaro Yoshida as a translator of English and American literature, one of the key figures in Magome who need revaluing.

キーワード：室生犀星、広津和郎、吉田甲子太郎、作家生活と出版、白秋観、モダニズム、翻訳、人間関係、探偵小説、再評価

Key words：Muro Saisei, Hirotsu Kazuo, Yoshida Kinetaro, Writer’s living and publishing, View of Kitahara Hakushu, Modernism, Translation, Human relations, Detective story, revaluation

---

1）いわき明星大学准教授　　2）実践女子大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程
3）実践女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了生

序に代えて

2009 年度から 2011 年度までの 3 年間、大田区（大田図書館長）と実践女子学園（本学園理事長）の契約により、大田区立郷土博物館が所蔵する馬込文士村の資料整理を行った。3 年間の活動内容や整理点数等は本学園経由で博物館へ報告を済ませているが、ここでは、3 年間の活動を通して今後の研究に資する報告を行いたいと考えた。実際の作業においては、院生や学部生、短大生や社会人などにも携わっていただき、大人数での作業を実施した場面もあったが、ここでは、最終年度まで作業に携わった主要な調査員や主任調査員と共に研究報告を行うこととした。

馬込文士村に関わる研究上の諸問題 …… 髙瀬真理子
室生犀星と北原白秋 …… 能地　克宜
広津和郎の問題意識
「主題歌は広告文か ── 末弘博士の『著作権問答』を駁す ──」を巡って …… 山口みなみ
馬込文士村資料から見る吉田甲子太郎の一側面 …… 田嶋　彩香
吉田甲子太郎翻訳関係資料に関する調査報告 …… 祖母井千秋

以上のタイトルでそれぞれに研究報告する。髙瀬は、馬込文士村全体を見渡しつつ、全体的に把握すべきことを概説し、特徴的に指摘すべきところと、全体的に今後必要となることについての指摘を行っている。能地は「白秋をおもふ記」を中心に犀星の白秋観をまとめている。山口は、広津の草稿と発表形との異同を検証し、広津の著作権意識、さらにこの時期の作家の生活と出版資本に対する認識等について考察している。田嶋は、吉田甲子太郎について、山本有三との関係を軸に還暦関係の資料や葬儀関係の資料から、その多様な姿をとらえ、馬込文士村における隠れた主要人物としての評価を試みている。祖母井は、吉田甲子太郎の翻訳家としての側面に光を当て、英米文学研究の立場からその翻訳の検証を行っている。

今回の報告を緒として、馬込文士村の文士たちに研究の目が向き、また、大田区立郷土博物館蔵資料の調査研究、もしくはその活用が進むことを強く願っている。これらの資料が一般に広く使えるようになることによって、最終的には大森・馬込という地域に社会の目も多く注がれるようになるであろうと信ずるからである。

付記：今回の各研究報告に使用される文学資料については、大田区立郷土博物館の資料特別利用承認（大田区教育委、教育長）を受け、著作権についての必要な使用許諾処理を行った上で掲載していることを断書しておく。

（文責：髙瀬）

馬込文士村に関わる研究上の諸問題

髙　瀬　真理子
日本語コミュニケーション学科教授

１．馬込文士村とは何か

大正 12 年５月、『都新聞』の学芸部長上泉秀信に勧められて、尾崎士郎と藤村（宇野）千代が、東京府荏原郡馬込町 1578 番地の中の 10 坪ばかりの農家の納屋を買い取り、六畳一間と土間の家を建てて住んだ[1] ところから馬込文士村の歴史が始まると言ってよい。それが大正 12 年９月の関東大震災を経て、「家を失った文士たちは、当時新興住宅地として開発され始めていた馬込へ尾崎士郎がさそって次々と文士が移ってき」[2] て、最初の賑わいを見せるのが昭和５年ぐらいまでと言えるようである[3]。文学史的に明確な定義があるわけではなく、地元行政等の尽力によって、現在、大田区の「馬込文士村案内図」では、「旧馬込村を中心としてその周辺部」の「山王、中央、大森北の一部」なども含み、年代も「大正 12 年から」「戦後の山本有三から三島由紀夫まで幅広くとらえられて」いる。文士も「文化創造の担い手として、文士だけでなく芸術家をも含めた幅広い範囲でとらえられて」[4] いる。

また、尾崎士郎らの功績が大きいにしても、馬込文士村以前に、大正期から芸術的な集まりがあった土地柄であったことも指摘しておく必要がある。大正５年から８年まで望翠楼ホテルで洋画、日本画、版画等を一堂に会した展覧会を開催していた木原会の活動や、大正８年頃から関東大震災頃まで望翠楼ホテルで開催されていた大森丘の会という文化人交流、また同時期に山王の長谷川潔邸で開かれていたという詩の同人会、仮面の会の活動などが上げられる[5]。これらの下地があったことが、文士たちを集まりやすくしたことであろう。

さらに、馬込の起伏に富んだ地形が文学を生み出す場として適していたこと、時代背景が震災後の復興期と重なり、新しい文化の流入を許す世相であったことと同時に、時代の変革期でもあったので、プロレタリア文学の台頭と同時にインテリの無力感[6] も時代の空気の中にあった。また、集まった文士たちの多くが、名を成したと言うにはまだまだ途上の人々であった。それが故に、彼らは肩を寄せ合い、助け合って生きていた面がうかがえる。

なお、馬込文士村を考える上での参考文献としては、染谷孝哉『大田文学地図』（蒼海出版、1971 年）、近藤富枝『文壇資料　馬込文学地図』（講談社、1976 年）、野村裕『馬込文士村の作家たち』（馬込文士村を探ねる会　1984 年）、大田区史編さん室「馬込文士村の作家たち」（『史誌』32 号 1990 年）が上げられる。文士村の空気を伝える長編小説としては、尾崎士郎『空想部落』（新潮社、1936 年）、榊山潤『馬込文士村』（東都書房、1970 年）がある。また、尾崎士郎の随筆に多数、馬込に触れたものがあり、これらを丹念に整理すると、当時の馬込の様子がもう少し明確になると思われる。

２．モダニズムと文士村

ａ．モダニズムの精神、ダンスと文士村

菅野昭正は、「モダニズムと名づけられる新しい現象が世の中の路頭にあふれはじめたのは、関東大震災（一九二三年＝大正十二年）のあと、大正末期から」で、「一九三〇年は日本のモダニズムの潮流が頂点に達した年だった」と述べ、『オール讀物』や『モダン日本』の創刊もこの年であることを指摘しながら、室生犀星の「モダン日本辭典」[7] を例にとり、大森馬込地区が「モダン趣味」の郊外の典型であったことを指摘している。また、「産業構造の変化」や「都市化の進行に適応」するためのキーワードとして「合理的」「能率的」「軽快」「洗練」を掲げ、堀辰雄を例に引きながら「モダニズム本来のあり方」とは「真に軽快な精神」であり、それは、堀の言う「深い事物を軽快に考えるところの新しい精神」のことであると解説している[8]。実際には、文学に限らず、生活のさまざまな場面にモダンが氾濫し、それは軽佻浮薄な都会的「消費」と「快楽」の文化を生み出すことになり、文学では新興芸術派の出現をみることになる。

都築久義は、榊山潤の『馬込文士村』のあとがきを引いて次のように述べている。

> 日本中の景気がどん底にあり、街に失業者があふれ、世相は暗かったが、馬込村の一角たけは笑いがたえなかったのは、一つは尾崎士郎の存在であり、もう一つは萩原朔太郎や衣巻省三らの詩人グループと文士夫人の交流が活発であったからであろう。この村の住人たちが後に書いている回想録を読むと、いつも誰かが尾崎士郎の家に集まり、文壇の動きや文士や村の噂を酒を酌み交わしながら語り合っていたということだ。
>
> もう一方の萩原朔太郎や衣巻省三らは、尾崎たちとは対照的にダンスを流行させ、毎晩のように彼らの家でダンスパーティーを開いていた。若い文士たちや文士夫人たちが集まり、宇野千代も洋装・断髪で村を闊歩し、ダンスにもときどき出かけていたらしい。文学論に口角泡を飛ばす昔ながらの「文士」たちとダンスに興じ、断髪と洋装に身を包んだモダンガールが混在していた「馬込文士村」の外から見た風景はたしかにこの時代にあっては異様であった。[9]

しかし、その光景は、モダニズムの視点からすれば、時代にそぐうものであった。不幸にも、そこで流行ったダンスをヨーロッパ風な大人の文化としてとらえた朔太郎が、夫婦倦怠回避の刺激と考えて稲子夫人に勧めたところから事件が発生する。実際に流行したダンスはアメリカから入ってきた軽佻浮薄のそれだったのである。そのダンスの流行に伴い、宇野千代の断髪にはじまり、川端康成夫人と稲子夫人の断髪へと波及した。

川端康成はこれを叱り、程なく浅草の方へ転居していく。稲子夫人はまさしく偽のモダニズムの渦に巻かれて恋愛事件を起こし、それが馬込文士村全体を覆う空気となる。尾崎士郎は「馬込放送局」と呼ばれる仲間たちを募って事の真相を突き止めようとし、家庭に残された娘たちを案じてさまざまに介入するし、尾崎の意向を受けた広津和郎は、朔太郎と複雑な関わり合いを持つ。親友の室生犀星も黙っていられなくなって、さまざまに世話を焼き、馬込文士村初期の大事件となる。

この事件に先駆けて、湯ヶ島と馬込を舞台に、宇野千代と尾崎士郎にも梶井基次郎をめぐって

の亀裂が生ずるが、尾崎には、千代と清子夫人をモデルに扱い、その二人の間で右往左往する自分をもモデルにした小説「笑ふ恋人」（『婦人公論』連載　昭和 12 年）がある。広津和郎はこのころの文士村の空気を「昭和初年のインテリ作家」（『改造』昭和５年４月）に描き、朔太郎の家庭のことは、室生犀星が「浮気な文明」（『改造』昭和４年８月）に描きこんでいく。犀星は、おおよそ事件と同時進行で筆を進めており、その反響もまた大きかった。朔太郎は表層モダニズムの犠牲者となって妻と離縁し、娘たちを連れて前橋へ引き上げる結果となる。

この一点をとっても昭和４年で転出する朔太郎が、文士村の中心人物のひとりであったことが分かるが、尾崎と文学活動でも意気投合している。尾崎は、「毎日、道をぶらついていると誰かに会わぬということはない。朝、宿酔にどろんと濁つた頭を風に吹かせながら、窓際に寝ころんでいると、色のどす黒く、眼の大きい、風采のあがらぬ男がのつそり入つてきた。これが萩原朔太郎で彼も私の家から森を一つ越えた高台に、昨日、引越してきたばかりなのである。萩原と私はすぐ肝胆相照らした。彼が雑誌を出そうというので『没落時代』という雑誌を出すことにした」[10] という。話は大正 15 年のことのようだが、その結実が昭和４年『没落時代』の創刊[11] である。尾崎は「一号出しただけで、『新文学準備倶楽部』と改題したが、これも一号で廃刊の止むなきにいたつた」と述べている。つまり、文士村の核であった尾崎士郎と萩原朔太郎の接点は、馬込文士村を考える上で、重要であることを指摘しておきたい。

ｂ．探偵小説と文士村

馬込文士村を考える上で、もう一つ重要な問題は、円本ブームに始まる読者層拡大と大衆化の延長上に発達する探偵小説との関係である。それは、関東大震災後、拡張する都市とともに、移動する市民に従って伸張していく郊外を背景に、文学の舞台も拡がっていくことを意味している。「都市から郊外へ ── 1930 年代の東京」[12] には、「探偵小説（ミステリ）は、日本でも一九二〇年代から翻訳、創作ともに盛んとなり、三〇年代には一般に広く読まれるようになる」とある。そこで活躍した江戸川乱歩の回顧録[13] を元に大正末期から昭和初期の探偵小説についておさえておきたい。

江戸川乱歩は編年体で書き綴っているが、その「大正十二・十三年」の項目に「主な探偵小説家の処女作発表の順序」を記している。大正 10 年度の項では、横溝正史が「恐ろしき四月馬鹿」という作品で『新青年』４月号に登場している。江戸川乱歩自身は、大正 12 年度の『新青年』４月号に「二銭銅貨」で登場、また、昭和６年からの馬込文士村の住人、城昌幸は、大正 14 年度の『探偵文芸』４月号に「脱走人に絡まる話」で登場する。この頃の探偵小説界と文壇の距離は割合に近く、大正 13 年「新青年」夏の増刊号には探偵小説論として、内田魯庵、佐藤春夫、久米正雄、平林初之輔などの名前が見える。

「大正十四年」の項目では、９月に『探偵趣味』という雑誌が創刊され、編集は同人交代制で発行されるようになるが、その同人リストを見ると、江戸川乱歩をはじめ、平林初之輔、城昌幸、片岡鉄兵、国枝史郎、横溝正史、吉田甲子太郎、夢野久作らの氏名がある。乱歩はこの頃から純探偵小説が純粋文学になり得るかどうかに関心を持っていたという。このリストで、注目したい

のは、城昌幸と吉田甲子太郎である。また、この雑誌の八号には萩原朔太郎が寄稿している。乱歩は「大正十五年」の項目で、朔太郎との出会いの事情を詳細に語り、さらに朔太郎の『探偵趣味』大正 15 年の 6 月号に寄せた「探偵小説に就いて」の文章を引用すらしている。

朔太郎は、「マッサージの秘密倶楽部に就いて訊ねる為に江戸川乱歩を訪れたのであるが、乱歩の人柄が気に入」り、乱歩は「かねてから著名の詩人を、大いに尊敬していた」ことから友情が成立している。朔太郎が「探偵小説に就いて」の中で、乱歩の「二銭銅貨」に不満を言いつつも、「人間椅子」を非常に褒め、探偵小説は「未知に対する冒険」であるべきことを熱っぽく説いており、その詩人的情熱がさらに乱歩の気持ちに響いている。朔太郎は、馬込時代に稲垣足穂に乱歩を紹介したらしく、朔太郎と足穂の間にもそれなりのつきあいがあったことが見えてくる。朔太郎と乱歩の交際は、朔太郎が昭和 17 年に亡くなるまで続き、著書を贈り合い、会って話もしていたようである。

乱歩と知り合った大正 15 年に、朔太郎は馬込村平張に転居している。朔太郎は、馬込におけるモダニズムにおいて重要な役割を果たしただけでなく、探偵小説についても、乱歩と重要な接点を持っていたことが分かる。さらに、馬込と探偵小説を結ぶラインに城昌幸と吉田甲子太郎がいることを指摘しておきたい。

c．城昌幸についての研究上の課題

城昌幸は、仕事によって名前を使い分けている。詩人としては城左門、作家としては城昌幸、また編集者としては本名の稲並昌幸を名乗っている。それが故にそれぞれの業績がそれぞればらばらに認められている節がある。詩人としての城は、父親に反対されながらも、日夏耿之介の「奢灞都（さばと）」での活躍をはじめ、博物館蔵の遺品類を見ると、堀口大学との交際にもかなり密なものが考えられる。一方、小説の方では、江戸川乱歩の活躍のそばにあって地味に長く作品を書き続けている。母方が幕臣であったことからか、町の捕り物とは一線を画す「若さま侍」シリーズを書いて好評を博した。後年には、雑誌「宝石」の社長としての活躍もあるが、それらの詩人と小説家と編集者の連関についての研究が望まれる。

d．吉田甲子太郎についての課題

吉田甲子太郎は大正 11 年から馬込に住んでいた[14)]。尾崎士郎の『空想部落』の村長、柿村保吉や『京浜国道』のモデルとなった人物でもあり、馬込の空気を描いた小説には欠かせないキャラクターとして榊山潤の『馬込文士村』などにも登場する。但し、昭和 2 年、円本ブームの中で出された平凡社の『現代大衆文学全集』に乱歩や城の名前はあるのに、甲子太郎の名前は見当たらない。春陽堂の『創作探偵小説選集』などでも同様の傾向がある。滑川道夫によれば、『新青年』に探偵小説の翻訳[15)] を発表していたという。確かにそのように考えると、多く裏方に回って、海外の探偵小説の翻訳家として『新青年』誌上で活躍していたことになる。その際に大正期には、吉田夏村、吉浦周太郎などの筆名を用いているとの指摘がある。また、昭和 10 年代には児童文学に該当する作品について朝日壮吉の筆名で発表したものがあるが、これらの中には教科書採用

になった作品もあって、この筆名が甲子太郎であることは、広く知られている。実際に大田区立郷土博物館に所蔵されている吉田甲子太郎関係の雑誌の切り抜きには、それらの筆名のものもあり、本人が関わったものには、必ずと言っていいほど本人によるものらしい校正の跡がある。その中には、滑川の指摘にはないのだが、「伴くろと」[16] という筆名が存在する。この名前で書かれたものは、探偵小説と思われ、多くは『新青年』に掲載されていたが、吉田甲子太郎の業績全体を考える上で、一考に値するものであると思われる。

吉田甲子太郎の出生地についても、東京とするものと、群馬とするものに別れている[17]。

おそらく、滑川道夫編のものが一番信頼度が高く、本人からの聞き取りによるものであると思われる。従って、「群馬県甘楽郡」の生まれであるとするのが妥当である。また、このような差違が発生した原因については、幼少期に何らかの事情があって、「一家上京したため」、甲子太郎自身に「群馬時代の記憶はない」ことと、本籍が「京橋区銀座西」になっていた[18] ことからくる錯誤があったと思われる。但し、滑川が、甲子太郎という名前の命名理由を「甲子（きのえね）の年に生まれたため」としているのは誤りである。甲子太郎の生まれた明治 27（1894）年は甲午（きのえうま）だからであり、それを命名理由とするには、いわゆる裏干支を採用したとしなければならないが、何らかの錯誤があるものと思われる。

e．円本ブーム後の探偵小説と文士村

吉田甲子太郎は「大正末期から昭和６年頃まで、推理小説・ユーモア小説・時代小説などペンネームで『なんでも書いたが、食えるようにならない』（自筆略歴）」状況にあったというが、尾崎士郎[19] によれば、多くの馬込の文士たちが同じような状況にあったようだ。

> そのころから、純文学と大衆文学、私小説と本格小説といったような問題について論議はたえず繰り返されていたが、しかし、結局、生活の根本に横たわる重大な事実は、時とともに勃興しつつあるプロレタリア文芸と、みずから没落の運命に甘んじようとするインテリ作家との対立であった。
>
> これは、決して簡単な時代の表層に浮かび上がったものではなく、もっとも純粋な意味で生きるという事実に決定的な対立をしようとするものである。
>
> それにしても、当時の馬込村の住民ほど、時代に対して敏感なものはなかったといってもいい。みずから没落することを誇りとし、没落の中に生きがいを見いだそうとする感情が次第に私たちの生活に浸潤してきた。
>
> 広津、室生の両氏は、年代的なへだたりがあったので、こういうふんい気の中にまき込まれることはなかったが、萩原朔太郎などは、むしろ私たちの先登に立つ老騎手であり、私はほとんど連日連夜、彼と談論するのを日課のようにしていた。

また、尾崎はそのような文士たちの貧しさを「藤浦洸の貧乏ゆすり」に象徴させている。

昭和４年、円本ブームが去り、それに続く探偵全集として改造社、博文館、春陽堂、平凡社が競ったようだ。改造社のものは、『日本探偵小説全集』なので、収録作家は、乱歩の他に横溝正史や城昌幸、さらに文壇の大物である谷崎潤一郎、佐藤春夫、芥川龍之介等の名前が目立つ。し

かし、他の３社のものでは、圧倒的に日本人作家が少なく編纂されている。そのために、多くの訳者を必要とし、乱歩の例でいうと、自分で訳するだけでは間に合わず、代訳の仕事を依頼するほどであったという。広津和郎の「昭和初年のインテリ作家」でも「その翻訳は昔その出版社から出版されて大分売れたものであつたが、今度その予約募集の叢書の中に這入るために、出版社から彼のところに包金を百圓とどけて来た」などという叙述もある。また、馬込文士村の事例でも尾崎士郎と広津和郎が『世界大衆文学全集』[20] の仕事を請け負い、41 巻ハーディ『テス』の翻訳を広津が､47 巻カートン『あの山越えて』の翻訳を尾崎が担当して同じ函で配本されている。このシリーズでは、他に久米正雄や佐佐木茂索、佐藤春夫など、かなりの作家たちの名前がある。インテリの没落と言われた時代、文士たちが生活を立てるのに、自作の作品発表だけをしていたのではない様子が見えてくる。

３．室生犀星「大学と薬罐」の周辺

昭和７年、吉田甲子太郎は「山本有三が創設に尽力した明治大学文芸科」に「教授兼幹事」として就任する。甲子太郎は、山本有三には旧東京専門学校の「卒業期に近いころから」[21] 師事していた。着任当時、吉田の長兄・三市郎が明治大学の専務理事でもあった。山本有三文芸科長の下、著名な文士を非常勤講師として招聘することになった。吉田甲子太郎は、室生犀星に依頼した。室生家と吉田家は、日常的に子どもたちが行き来をしていて、交流があった[22]。「大学と薬罐」は、昭和８年７月「新潮」に発表された随筆である。作品は「僕は去年の初夏に明治大学の講師になれといふ交渉を吉田甲子太郎氏から受けた」という一文から始まる。講師控え室で目についたのは、「濃い藍色の大薬罐の白湯を呑む」疲れた教員たちの姿だった。教壇に登壇してみて「八十何人かの生徒がぎつしり詰つてゐて、顔と顔とがあぢさゐの花のやうに重なり合ひ、むんとした逞しい青年の体質の匂ひと重みとがすぐ僕を圧迫した」という状況に陥り、講義終了時には、「貧血でふらふらし」ながら控え室に戻り、そこにある「薬罐」の重大な役割を実感し、「お湯をうまさうに乳ぶさをすふやうな音をさせながら呑」んで、「どっかりと」座り込み、甲子太郎を驚かせている。犀星はその一回で講義というものに懲り、「僕はどうもかうもない、死にそうです。多分あの講義を定刻どほり二時間打通しつづけてゐたら、もう三日あとの馬込の僕の家で吉田甲子太郎氏は厳粛な顔つきで、このたびはお気の毒なことをしましたと悼(くや)みの言葉を考へながら云はれたに違ひない、 ―― と、までは云へなかつたが僕はとてもだめです、この通りです」とまでは言って、以後平に辞退したようである。

ところで、後年吉田甲子太郎は、『明治大学新聞』の「文芸科の思い出」の欄に「“室生犀星”苦しい告白」[23] と題し、「文芸科創立当時の挿話」の一つとして披露している。そこで分かることは、犀星の張り切りようである。まず引き受けた後の質問が「洋服を新調しなければならないだろうか」ということであり、当日、室生家の前には「てらてら光る巨大な自動車がひかえてい」たという。それで明治大学まで乗りつけると知って、専任教員である甲子太郎先生の方が内心驚いたようだが、犀星にとっては、きわめて晴れがましいことであったのだろう。犀星の担当講義は「詩歌研究」であり、当日の講義内容は、「桜花道人の詩と三好達治の詩の比較研究」である

という。

駿河台の明治大学に着いて犀星を案内した甲子太郎が、講義後に見たものは、「ぐつたりしたかたちで長椅子にもたれ大ヤカンから番茶をついでは、それを、しきりに飲んでいる」犀星の姿だった。飲んでいたのが「白湯」だったのか「番茶」だったのかにズレはあるものの、薬罐の中の飲料がこの話の鍵であることに変わりはない。甲子太郎が犀星から聞いたところによると「教場で完全に学生の顔が二つにも三つにも見える。黒板に字を書こうとすると手がふるえて書けない。せつかく調べてきた書物のしおりのところをあけようと思つても、どうしてもあけることができない。時計を見ようとしても、帯のあいだから時計を取り出すことさえできないという始末で、自分が何をしやべつてきたのか、われながら判然としない。こんなひどい苦しみはこれまで経験したことがないという告白」であったという。手慣れている甲子太郎先生は、学生に犀星先生の講義の感想を聞いて「なかなかおもしろかつた」という当時の証言を引き出してもいるのだが、「当の先生が二度と教室に立つのは、死んでもいやだというので」「ただ一回でやめになつてしまつた」と経緯を述べている。「死んでもいや」というより「二度教室に立つと死ぬ」と思い込んでいるのが、犀星の真情に近いと思われる。甲子太郎は「洋服を新調されなくて、まあ、よかつた」と思ったところで締めくくっているが、今まで、犀星側の作品でしか知ることのなかった犀星の幻の講義が、明大側の資料で立体的に分かるようになったことは大きい。

なぜ、元から人前で理路整然と話すことの苦手な犀星が、講師を引き受ける気になったのかなど、これらの人間関係と相俟ってさらに探求すべき課題が見え、そこに至る流れには、大正末から芥川龍之介を見習って、他者の作品や映画に興味を持ち、犀星なりの批評を試みていたことと無関係ではないことが浮かび上がってくる。芥川没後、芥川の「刻苦勉励」を我が身に引き受けていた犀星の努力が背景にある。犀星と評論についての詳論は稿を別に持ちたいが、明大講師受諾の背景に、その自信がなければ、おそらく引き受けてもいなかったであろうことは、指摘しておきたい。

４．その他、館蔵資料調査で期待される今後の課題

大田区立郷土博物館での資料整理では、遺品、原稿、書簡、色紙、短冊、掛け軸、絵画、書籍、雑誌などがあるが、特に書簡資料の活用が望まれる。書簡は、全体で概算すると 825 通ほどが収蔵されているが、収蔵数の多い文士を上げると、川端龍子の 167 通、犀星の 187 通、室生朝子の 112 通、甲子太郎関係の 160 通、関口良雄の 40 通などが目立つ。特に犀星に関して言えば、朝子分の 112 通の中に犀星入院中の用件が交ざっており、室生犀星関係はかなり充実していると言える。またその中に森茉莉が発信した書簡が多く入っており、森茉莉と犀星朝子父子とのつながり、さらに室生朝子、萩原葉子と森茉莉という第２世代の交流状況、また、森茉莉が切手を貼らずに世田谷の家から朝子の許へ手渡ししたと思われる犀星の癌治療について真剣に心配をして書いたと思われる書簡など、今後の文学研究に資するものが多く含まれている。吉田甲子太郎もあまり知られていないが故に、その人間関係の状況が分かるだけの分量もあり、母らくの死去に際してのお悔やみ状や甲子太郎の句集「杉亭句集」の礼状などでは、同時期にまとまって多く

の書簡が寄せられているので、人間関係も把握しやすく、また、その中に貴重な情報が紛れていることもある。関口良雄は古書店「山王書房」を営んでいたが故に、作家に知己が多い。特に、「偽犀星」が犀星の亡くなった一年後に出している葉書には愛嬌がある。それが尾崎士郎の戯れであることが分かる時、やはりなんとも言えない馬込文士たちの心の通い合いが見えてくる。

さらに、収蔵数は少なくとも尾崎士郎と宇野千代の寄せ書き書簡や、前述の城左門などは、佐藤春夫や堀口大学、横溝正史などとのやりとりの分かる書簡が収蔵されていて、今後、一般に活用しやすくするために、活字化していく作業が必須であることを指摘しておきたい。

付記：本稿は 2012 年 9 月 22 日　日本近代文学会　北陸支部例会での口答発表「昭和初期の馬込文士村 ― 研究上の諸問題と室生犀星 ―」（於　石川県政記念しいのき迎賓館）の一部である。

注

1)　大塚豊子「年譜」『宇野千代全集』第 12 巻　中央公論社（昭和 53 年）

2)　久保田正文「馬込文士村のなりたち」『彷書月刊』弘隆社（1998 年 7 月号）

3)　「馬込文士村ガイドブック」大田区立郷土博物館（1996 年改訂版）を元に作成したサイト「馬込文士村へようこそ」（運営：社団法人大森倶楽部 http://www.magome-bunshimura.jp/modules/contents18/ 参照日 2012.10.11.）によれば、宇野千代、稲垣足穂、広津和郎、榊山潤など、昭和 5 年頃よそへ転居した作家が目立つ。

4)　城戸昇「馬込文士村とその周辺を歩く ― はみだし散策の楽しみ方」『彷書月刊』（1998 年 7 月号）弘隆社

5)　NPO 法人馬込文士村継承会資料より

6)　広津和郎「文士の生活を嗤う」『改造』（昭和 5 年 7 月）

7)　室生犀星「モダン日本辞典」『モダン日本』（昭和 5 年 11 月）文字通り、辞典風の作りで「少女の脚」「下の方の頬」「手帕」「離婚訴訟」「郊外のモダン趣味」「ソーセエヂの広告」等の項目が立てられている。

8)　菅野昭正「一九三〇年代とモダニズム文学」『都市から郊外へ ― 1930 年代の東京』世田谷文学館図録（2012 年）

9)　都築久義「尾崎士郎の文学的出発」『愛知淑徳大学論集 ― 文学部文学研究科篇』第 33 号（2008 年）

10）尾崎士郎『人間随筆』（昭和 32 年 11 月）六興出版部

11）『没落時代』創刊號　昭和 4 年 4 月　没落時代社発行、定価 10 銭　菊判 42 頁　表紙：中川紀元　発行兼編集人：尾崎士郎

12）前掲書『都市から郊外へ ―　1930 年代の東京』世田谷文学館図録（2012 年）

13）江戸川乱歩『探偵小説四十年』（1961 年）桃源社

14）滑川道夫編「吉田甲子太郎年譜」『日本児童文学大系』第二四巻「吉田甲子太郎　椋鳩十　林芙美子　田畑修一郎集」ほるぷ出版（昭和 53 年 11 月）には、昭和 6 年に馬込に転居したように書かれているが、その他の資料や小説等では、朔太郎の家庭内騒動の時にも主要な役割を果たしているし、アンダースンとのやりとりで原稿料を呑んでしまった事件の時にも、尾崎を筆頭に馬込の仲間が取り巻いているので、大正期から馬込に住んでいたものと考えられ、注 3 に掲げた資料を尊重する。

15）滑川道夫編「吉田甲子太郎解説」『日本児童文学大系』第二四巻「吉田甲子太郎　椋鳩十　林芙美子　田畑修一郎　集」ほるぷ出版（昭和 53 年 11 月）

16）大田区立郷土博物館には、「伴くろと」の筆名で出された雑誌切り抜きが 9 作品残されている。040‐2921、2951、2964、2971、2980、2999、3010、3030、3403。

17）吉田甲子太郎の東京を出生とする資料は、①『日本近代文学大事典』神宮輝夫「吉田甲子太郎」　②Web サイト「早稲田と文学」:「掲示責任者」について、「特に断わりがない場合、本ページ、および『著作権・使用許諾条件・掲示責任者の表示』として本ページへのリンクを持つページの掲示責任者は、早稲田大学図書館長です。」と断り書きがある。（http://merlot.wul.waseda.ac.jp/sobun/y/yo016/yo016p01.htm 参照日 2012.10.11.）　③大田区立郷土博物館『馬込文士村ガイドブック」（1996 年）の以上 3 点。群馬を出生とする資料は　① Web サイト「吉田甲子太郎」『Wikipedia』（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%89%E7%94%B0%E7%94%B2%E5%AD%90%E5%A4%AA%E9%83%8E 参照日 2012.10.11.）　② Web サイト「吉田甲子太郎」『青空文庫』（http://www.aozora.gr.jp/index_pages/person1258.html#sakuhin_list_1 参照日 2012.10.11.）　③前掲書、滑川道夫編「吉田甲子太郎年譜」『日本児童文学大系』第二四巻（昭和 53 年 11 月）の 3 点である。

18）大田区立郷土博物館資料 No.040‐3960「吉田甲子太郎、履歴書下書き」（昭和 21 年 10 月 28 日）

19）尾崎士郎「空想部落の頃」『文学の零点』永田書房（昭和 42 年 8 月）

20）『世界大衆文学全集』の広津と尾崎の担当した 41 巻と 47 巻は、昭和 5 年 5 月、改造社からの配本となっている。

21）前掲書、滑川道夫編「吉田甲子太郎年譜」『日本児童文学大系』第二四巻（昭和 53 年 11 月）

22）「馬込文士村」16 回「馬込道」1991 年 2 月 19 日『産経新聞』（室生朝子に取材した記事）

23）『明治大学新聞』昭和 29 年 10 月 15 日第 676 号　大田区立郷土博物館資料では、040‐2759 に該当する。

室生犀星と北原白秋

能　地　克　宜
いわき明星大学准教授

『室生犀星文学アルバム――第 27 回特別展示図録――』（大田区立郷土博物館、平成４・10、p.23）に「初出不明」と記され、『馬込文士村ガイドブック』（大田区立郷土博物館、平成８・３改訂版、p.70）にも図録として掲載されている同館所蔵室生犀星自筆原稿「白秋をおもふ記」（整理 No.0087）の初出が、今回の調査によって、角川書店より昭和 29（1954）年１月に創刊された雑誌『短歌』の１巻 11 号（昭和 29・11、p.64 ～ 67）であることが判明した[1)]。

同号は「北原白秋研究」という特集が組まれており、その執筆者を目次順に列記すれば、木俣修「北原白秋と『アララギ』」、吉田一穂「歌人白秋の詩的性格」、窪川鶴次郎「北原白秋覚書」、與田準一「白秋童謡私記」、室生犀星「白秋をおもふ記」、酒井廣治「白秋の童心」、村野四郎「追想と批判」、清水乙女「白秋の似顔絵」、中村正爾「北原白略年譜　著書解題」と続き、以下、白秋門下の歌人の短歌が掲載されている。同誌編集者太田朝男が同号「後記」に「この特輯は北原白秋の研究であると同時に、現代短歌の反省でもあります」と記してあるように、この特集の執筆者は、白秋にゆかりのある詩人・作家よりも、白秋門下の歌人の方が数が多く、このような特集及び執筆者の構成をふまえてみると、本資料が白秋の歌人としての人脈について触れることから書き出されていることも理解できる。

> 白秋には歌の方のお弟子さんがたくさんゐて、詩をかく後輩があまり集まつてゐない、歌人は礼儀が正しいのか、それとも古い子弟のよしみがのこつてゐるのか、白秋をまつり挙げてゐるところが礼儀的であり、白秋はそんなこどもらしいことを好いてゐて、近づいてくる人と大てい仲よくしてやり、殆どわかい歌人がまはりをぐるつと取り巻いてゐて、詩人はあまり近か寄つてゐない、萩原朔太郎とか私とかは白秋とはなれてゐる、そとがはの衛星のやうであつた。大手拓次は早くに死んでゐるし、幾らか有名になつた詩人では、私と萩原、それに大木惇夫くらゐであつた。[2)]

また、同館所蔵の他の犀星自筆原稿と比べて、「白秋をおもふ記」冒頭の段落に書き直しが目立つのも、そうしたことへの配慮の痕跡として見ることもできる。例えば、「嶽の扉」（整理 No.1565）冒頭の「戦時中、ただひとつ夜睡るときなどに、眼を閉ぢながら思ひ出しては睡むるよすがにするものは山のことだつた。」という一文が、「戦時中、ただひとつ夜寝るときに、眼を閉ぢながら思ひ出しては睡むるよすがにするものは山だけであつた。」と書き直されているのにとどまるのに対して、「白秋をおもふ記」冒頭の一節は、最初以下のように書き記されていた。

白秋は歌の方のお弟子さんが、何時もまはりにゐて、詩をかく後輩があまり集まつてゐなかつた。歌人といふものは礼儀が正しいのか、それとも古い子弟のよしみがのこつてゐたのか、白秋をまつり挙げてゐるところがあり、白秋はそんなこどもらしいことを好いてゐて、近づいてくる人と大てい仲よくしてやり、殆どわかい詩人がまはりをぐるつと巻いてゐて、詩人はあまり近か寄つてゐなかつた。萩原朔太郎とか私とかは白秋とはなれてゐる、衛星であつた。大手拓次は早くに死んでゐるし、幾らか有名になつた詩人では、私と萩原、それに大木熟夫くらゐであつた。

周知のように、白秋はその文学活動の初期から詩、短歌ともに発表してきた。その中で犀星は『思ひ出』（東雲堂、明治 44・6）をはじめとした白秋の詩に関心を寄せ、白秋に近づくこととなる。その頃の様子について、犀星は本資料で以下のように書き記している。

私がはじめて白秋に会つたのは、私の二十二歳の時だつた。白秋はもう一家をなしてゐて、私なぞ近よれないすぐれた名声をもつてゐた。飯田橋近くの宿だつたか、一軒家を借りてゐたか、よく覚えてゐないが、たしかに旅館住ひのやうでもあつた。紫檀の机の上に、手紙をかく箋紙をつかつて、詩をかいてゐた。三田文学に出すのだといつてゐたが、白秋はその箋紙にかいた詩を私にこれは君どうかね、といつて、見せてくれた。

本資料のうち、犀星自身と白秋の出会いを書き記した上記箇所には脱字が一字あるのみで、書き直しの跡がない。ここに白秋門下の歌人を意識せずに犀星と白秋の関係を書き記しているさまを窺うことができる。さらに言えば、本資料は前掲の冒頭段落に続いて、「萩原と私は白秋が先生であつたとはいへないが、先生でなかつたとも言へない、直接、私は白秋に詩をなおしてもらつた覚えもないが、わざわざ原稿を見てもらつたこともない」と書き出され、「歌人連は先生といふ称号のもとに集まつてゐて、私たちがその間にはいることが出来なかつた程の緊密さがあつた」と犀星・朔太郎の詩人と、白秋門下の歌人とを徹底して差異化していく。

このような記述は犀星の他の白秋について触れた著作にはあまり見られない。むしろ、白秋門下の歌人を批判した詩すら、犀星はかつて発表していた。『多磨』（昭和 18・1）に発表された犀星の詩「白秋先生」には、「あなたのまはりは／あなたを奉るつた人ばかりだつた／あれはいけない／あなたを軽く見せる／あれはいけない」[3] といった一節が見られる。『多磨』は白秋が昭和 10 年 6 月に結成した多磨短歌会の機関誌であり、この詩が掲載されたのは白秋没後であるが、白秋門下の歌人が数多く集っていたこの雑誌にその歌人について批判することも犀星は行っていたのである。

また、後に『我が愛する詩人の伝記』（中央公論社、昭和 33・12）としてまとめられることになる「北原白秋」（『婦人公論』昭和 33・1）には本資料で書き記すことをしなかった犀星の白秋に対する思いが見られる。おそらく以下のような記述が白秋に対して抱きつづけている犀星の本音ということになるだろう。

詩はやはり北原白秋が先生みたいなものだ。（中略）萩原朔太郎と私とはなんといつても白秋の弟子だ、原稿の字は一字もなおして貰はなかつたが、白秋のたくさんの詩のちすぢがからだに入つて、それが萩原と私にあとをひいてゐる、これほど明確な子弟関係はない、白秋も生前にはこの二人を弟子なんぞと言ふには、息子が大きくなりすぎてゐるのであればあれの好き勝手にさせておけばいいんだよと、弟子とは呼んではくれなかつた。しかし、おれのほねを拾ふやつはこの二人の男だ、あれはちすぢをひくことでは間違ひのない人だと、白秋は夫人にもそれは言はないで頭に持つたままで、死んでしまはれた。[4)]

ところで、本資料はこれまで見てきたように、犀星が白秋を語る際に白秋門下の歌人に対して、ある種の配慮を心掛けていたが、犀星が白秋の文学活動のうち、どのようなところに注目してきたかについては、白秋について書き記した犀星の他の著作とともに、一貫性を帯びていることもわかる。白秋生前に記された「馬込随筆　二　北原白秋」（『東京朝日新聞』昭和４・７・20）には、「何といつても自由な表現であらゆる言葉を生かしたことは、北原君の仕事のもつとも優れた人並以上に活躍した所以であらう」と記され、本資料では三木露風と対比しながら、以下のように書き記している。

白秋はもちきれないくらゐたくさんの物を持ち、その上、もつと持たうといふ意慾があつたが、露風はほんの少しか持たないでゐて、持つてゐる物まで棄ててゆくといふ質の詩人であつた。白秋は言葉といふものをどんどん作つて形を与へてゆくのに、露風にはさういふ言葉を作ることさへ出来ない、つまり言葉を作るやうなものが頭にないのである。[5)]

そして前掲『我が愛する詩人の伝記』の「北原白秋」には「この北原白秋といふ人は時分の頭の中で一偏活字をならべて見て、それがどのやうに本の中に刷られるかを、ちやんと見とどけてゐる人だ、そこには驚きを訓へとを詩はまるで解らないままで読ながら、そんな変なものを受け取つたのである」「『思ひ出』から何かの言葉を盗みだすことに、眼をはなさなかつた」とあり、犀星は自身の文学的出発期から一貫して、白秋の編み出す言葉に関心を寄せていたのである。

注

1)　同資料は『随筆　続女ひと』（新潮社、昭和 31･3）に収録されている。なお、室生朝子･星野晃一編『室生犀星書目集成－序跋付－』（明治書院、昭和 61・11）にも同資料は初出「未詳」と記されている。

2)　引用は初出『短歌』（昭和 29・11）に拠った。

3)　引用は室生犀星『餘花』（昭南書房、昭和 19・3）に拠った。

4)　引用は『室生犀星全集　第十巻』（新潮社、39・5）に拠った。

5)　注 2 と同じ。

広津和郎の問題意識

「主題歌は広告文か －末弘博士の『著作権問答』を駁す－」を巡って

山　口　みなみ

実践女子大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程

大田区立郷土博物館所蔵の広津和郎自筆原稿「主題歌は広告文か ── 末弘博士の『著作権問答』を駁す ── 」は、昭和７年９月号の『中央公論』（以下、発表形）に同題で掲載されているものの草稿である[1)]。以下本稿はこの草稿と発表形との異同を検証し、広津の著作権意識、さらにこの時期の作家の生活と出版資本に対する認識等について検討を試みるものである。

インクはブラック、松屋製・青罫・400 字詰の原稿用紙を使用し、左上欄外にアラビア数字で番号が手書きされており、計 26 枚にわたる。編集者による印刷指定等がないので、下書稿かとは思われるが、にわかに断定できない。草稿には著者の手入れが多量にあり、かつ『中央公論』に発表されたものと見比べてみると、広津の考えの根本は変わらないにせよ、多少の変遷をうかがうことができる。その変遷とは、広津の心の動きと言って差し支えなかろう。つまりこの草稿は広津の感情的な熱を帯びた段階のものなのだと言うことができる。そこでまずは、広津が誌上に反駁文を掲げるに至った経緯を説明しておこう（雑誌・新聞記事からの引用にあたっては仮名は原文のまま、漢字は新字で表記した。また、付されていたルビははずしたが、傍点は残した。なお、全集本文の引用にあたっては全て全集本文のとおりとした）。

広津の小説『女給』（『婦人公論』昭和５年８月号～同７年２月号）を原作とした映画の主題歌を巡ってレコードの発売元であるビクター蓄音機株式会社（以下ビクター）と広津との間にトラブルが生じていた。小説『女給』を映画化するにあたっては帝国キネマと交渉、契約を結んだが、ビクターは広津に直接了解を得ずに、塩尻精八作曲・西條八十作詞のレコード「女給の唄」を発売したのであった。発売から５、６ヶ月を経てもなお、あいさつにも訪れないと業を煮やした広津がビクターに詰問状を送った。その後のビクター側の「帝キネの宣伝のためにやつている」という、営利企業でありながら自らの利益を棚にあげたような主張にさらに憤った広津は、今後は自分の著作が原作の主題歌をビクターから発売することを禁じた。結局ビクターはこれらの要求をかわした形で「女給の唄」に続いて映画「女給 君代の巻」の主題歌「女給 君代の唄」（以下「君代の唄」）を同じく西條作詞で発売してしまうのであった[2)]。原作者が販売の取り止めを求めているのに、販売し続けているのは著作権のみならず人格権の蹂躙でもあるとして広津はビクターを告訴することに決めたのであった。

この件に関心を示した『中央公論』が、法律問題として広津の主張は認められるか否かについて意見を民法学者の末弘厳太郎（いずたろう）に求めた[3)]。末弘は、まず問題の主題歌「女給の唄」がどのような趣旨・性質のものかをインタビュアーに確認し、そのうえで「本を出版する場合の広告文見たいなものですか」と発言したのであった。心情として広津の怒り（自分の原作に対して第三者で

ある西條八十が作者の許可も得ずに作詞するということについて）は理解できるが、法律問題として考えると原作者の権利はそこまで広範囲には（発売禁止に至らしめること）およばないであろうというのが末弘の立場である。これを目にした広津が前述の反駁文を書いたのであった。

ところで広津の言い分とビクター側の言い分は当然のことながら異なっており、末弘がインタビュアーから聞いたいきさつについて誤りがあることを広津が指摘している。主題歌が映画の広告文のようなものであるという末弘の見解について、確かに広告文のような一面があることを承知しているとしながら、「その点で映画会社に抗議を申込みでもしてゐるやうに、末弘氏が『著作権問答』の中で解釈してゐるのは、それは何かの聞き誤りであ」るということが一つ。また「僕〔広津・引用者〕が新興キネマ（帝キネの後身）から『女給君代の唄』を作る事を依頼されながら、それを作らないので映画封切に間に合はないものだから、新興キネマで西條君に依頼したかの如く『著作権問答』の中に書いてゐられたが、それは事実が相違して」おり、広津によればビクターお抱えの作詞家である西條が作詞することは、すなわちビクターからレコードが出ることを意味するので、それを嫌ったために自分で「君代の唄」の作詞をすると申し出たというのが一つであった。結局「いつ映画が出来るかその時期を前以て云つて来ずに、突然手紙で『あなたの唄が間に合ひませんから、西條さんに頼まれました』と」いう連絡を受け、ビクターから西條作詞のレコードが売り出されることとなったのである[4)]。

広津は西條の作詞でレコードが作られたことを不服とし、原作者の権利を侵害していると訴えたわけではない旨反駁文で明かしている。これはこれで広津側の言い分であるから、鵜呑みにはできない。とかくこの手の争いは水掛け論に陥らざるを得ず、どちらの主張が正しいかを判断するのは容易なことではない。ビクターの解釈は、原作者である広津に作詞を頼まなかったために広津が怒っているのだというものであったのだろう。末弘がビクター側の主張の上に立ちながら「自分の小説が映画になる以上、主題歌も自分で作つて原作の芸術的効果を一層発揮したい、作家としてさうした希望をもつのは人情の自然だ」と心情面で広津に理解を示したが、広津は末弘の同情を一層激しくはねつけるのである。誤った情報の上で理解を示されても、所詮は誤りに変わりないというところであろう。

さて、この「女給の唄」、「君代の唄」をめぐる一連の騒動は周囲にどのように映っただろうか。『読売新聞』（昭和 7 年 8 月 2 日朝刊）の囲み記事「文壇の展望」では「小説家と映画会社、蓄音機会社、主題歌作家の四重葛藤奏なのだが兎角文士といふ古い職業は損をし易い。小説の何十倍も羽が生えて売れるレコードを見ながら些少の目くされ金で丸められてゐる文士の現状である。（中略）小説が映画化されてその主題歌までが小説に関係あるかないかは議論の余地があるがとにかく先端的な問題」であるとしている。また『東京朝日新聞』（昭和 7 年 8 月 20 日朝刊）では「『女給』主題歌で訴訟さわぎ」という見出しで「広津氏の憤慨は極度に達し遂に告訴を提起する決心を固めるに至つたのであるが、その成行について法律家、映画会社、レコード会社等各方面から多大の関心を以て見られて居る」と報じられた。広津自身もこの問題が自分とビクターとに限ったものではないこと、他の小説家や法律家が関心を抱いて議論することを心の内では期待しているのであった。しかし、努めて冷静に持論を展開しようとしているものの、堪え切れぬ

ほどの憤懣が広津を饒舌にしていることは疑いようもない。以下この点について草稿と発表形とを比較し、広津の心の動きに迫ってみようと思う。無論、草稿と発表形とを単純に比較することは難しく、本来ならば草稿本文の翻刻を示し細部にわたって検証していくべきところであるが、その一部を紹介するにとどめる。なお、その際、以下のような手順で内容を示すこととする。

① 草稿の段階で手を入れられたもの、あるいは草稿で書かれていながら発表形では削除されたもので検討すべきと思われる箇所を一部抜粋して考察する。

② 草稿では挿入・削除が入り乱れているが、ここでは草稿上で最終形と思われる形を優先して表記する。初期形と最終形を見比べる必要がある場合は適宜その旨を記す。草稿と発表形との異同において重要と思われる箇所は該当部分を併記、該当の頁を付する。

③ 各段落冒頭にあげるアラビア数字は草稿左上欄外に記された通し番号に則る。また、頁をまたぐ場合は頁の変わり目に〔13〕のように記す。それより以降の文は次頁にあたる。

④ 引用するにあたって旧字は新字に改め、仮名遣いは草稿に従った。拗音・促音は用いない。

〔1〕草稿における表題の初期形は「主題歌か広告文か ── 末弘博士の『著作権問答』に答ふ ──」であり、それに手入れをして「主題歌は広告文か ── 末弘博士の『著作権問答』を駁す ──」と直している。それが発表形のタイトルとして採用されている。「答ふ」よりも追及の色が濃い表現である。「答ふ」では手ぬるいと判断したためであろうか。

〔2〕「氏は法律的解釈と銘を打ちながら、氏らしくもなく、こんな常識的な仮定の上に立って、論を進めてゐられるが、併し氏が法曹界の権威者であり、氏の一言一句が世間に信用を以て通用するといふ事を考へると、氏の『著作権問答』までが、著作権といふものについて専門に研究してゐる法律家の尠い日本では、何等かの権威を持ち始めないとは限らないし、さういふ事にでもなれば著作家一般に取つて甚だ迷惑なことだから、僕は此処で著作家の立場から、反駁しておく必要を感ずる。」という文が草稿にはあり、棒線で削除されている。法曹界の重鎮である末弘の判断が「何等かの権威を持ち始めないとは限らない」、このような発言は「甚だ迷惑」であるといういささか感情にまかせたもので、さすがに発表形では「僕は著作家の立場から、氏のさういふ解釈を反駁する必要を感ずるので」（380 頁）と改められている。

〔6〕「それだのに、ビクター会社は後に（今年になつて）僕の許可なくして、更に『女給君代の唄』のレコードを発売したのである。 ── 僕がビクター会社を膺懲しようとおもいたつたのはそのためである。」という文を草稿上で一旦削除しているが、発表形においても「── 僕がビクター会社を膺懲～」以外の部分については若干体を変えた形で復活している（382 頁）。広津が何とかしてビクターを罰してやりたいという気持ちがそのまま「膺懲」という言葉に表れている。

〔7〕「（西條八十君よ、君の唄は末弘厳太郎博士に云はせると、本屋の広告文見たやうなものなのだそうだ！）」及び「（西條君には気の毒だが。）」という西條へ訴えかけた文が発表形では反映されていない。西條に対する配慮であると見受けられるが、広津自身「広告文と同じ

立場をしてゐると云へるだらう」（草稿からの引用）として主題歌は広告文と同じ扱いであるという末弘の考えを一部認めている。

〔9〕「── 末弘氏も法律的解釈と銘打つからには、主題歌は広告文見たやうなものだ、といふ常識的に云つてさへ認識不足の仮定の上に立って、意見を進める事は反省されたがいいと思う。」という文が草稿に一旦は書かれるも、作者によって波線で削除されている。法律の専門家に対してあまりに率直すぎると思ったのか、あるいはすでに示唆している内容だと判断したのか、発表形には見られない。

〔13〕・〔14〕「筋、テーマ、内容といふものが、小説の場合と歌の場合と一致するかしないかといふ事は、甚だ六ヶ敷い問題で、若し筋を取らなく、テーマを取らなく、又内容（この言〔13〕葉は文学的に云つて甚だ大きい、広い意味を持つので、但し書きが必要だが、今はそんな事を説明してゐる場合ではないから、そのまま使つて置く）を取らなくとも、原作よりの暗示によつて成り立つ以上は（この暗示の意味も厳密に云ふと六ヶ敷い問題だが）そして原作者よりの暗示によつて成立つてゐる事を主題歌作者自身が承認してゐる以上は、それは『原作によつて生れた主題歌』であるといふ事を否定する事は絶対に出来ない。〔14〕」と草稿にある。広津も「六ヶ敷い問題」と漏らしているように、この文章はむしろ広津の主張の苦しさを露呈するものである。しかし西條が原作なくして主題歌はできないという意味のことを広津に答えたため、「女給の歌」については小説『女給』が元となっていることは明白だとしているのである。この部分は発表形に反映されていないが「主題歌は創作である。但しそれは『原作による』といふ但し書きのついた創作である。」（384 頁）とごく混乱の少ない文で主題歌と原作の関係について述べている。

〔15〕「歌と小説の形式や性質の相違上、一つの小説から一つの歌が生れる場合、必ずしも小説と同じテーマ、小説と同じ筋を、その歌が取入れるわけのものではない。」と草稿にあるが、前述したように苦しいものである。また「歌は小説からの暗示によつて作られる。」という文が後に続くが、この一文は波線で削除されている。草稿中で多用された「暗示によつて」という表現が発表形で用いられていないところを見ると、その語が与える印象を考慮した結果であるといえるだろう。ただ、広津が草稿で「暗示」と用いたのは、主題歌は原作から必ず何かしらの着想を受けているはずだという考えからであり、むしろ「暗示」という言葉で範囲を広く取ることによって原作者の立場を強めようとするものではなかったか。

〔17〕・〔18〕「（僕は此処で明かに断はつて置く。『女給の唄』は僕の原作によつて出来たので、映画の主題歌となつてゐても決して映画から出来たのではない。何故かといふと、主題歌の出来た方が、映画が出来たよりも先だつたからだ。この事は映画になつたシナリオが、僕の原作からできたと同じく、レコードになつた主題歌も、僕の原作から出来た事を意味する。こんな事は断る必要はない事のやうにも思はれるが、併し理由にならない事が〔17〕理由になるやうに思ひたがるビクター会社などを相手にする場合は、やつぱりはつきりさせて置かないわけに行かない。）〔18〕」と原作によって歌詞が作られていることが強調される。確かに「女給の唄」の歌詞は原作に沿っていると思われるが、西條は原作とはまったく関係の

ない歌詞を手掛けたりもしている[5)]。西條としては原作者との無益な争いは避けたいはずである。

〔21〕草稿では「僕は唯ガムシヤラに主題歌に著作権を振りかざさうとするのではない。」という一文の後に挿入する形で「氏が事情を知らずに憶測してゐるやうに、映画会社が宣伝用として用ひてゐる主題歌を、原作者たる自分が作る権利があるなどという意味で権利を振りかざさうとしてゐるのではない。」と書かれる。発表形では「映画の宣伝領域を越えない場合の主題歌について、ガムシヤラに著作権を振りまはさうとしてゐるのではないのである」（384 頁）というようにやや整理されている。ただ、原作者たる広津が、自分の手によって主題歌を「作る権利」があることを振りかざしているわけではないという主張がこの文では見えにくくなっている。

〔23〕「末弘博士が僕が新興キネマから歌を頼まれ、それを書かないものであるから、新興キネマで止むを得ず西條君に頼んだもののやうに書いてゐられるのは、此いきさつを新興キネマかビクター会社かどちらかが、自己弁護のために事実を曲げて逆宣伝するのが、多分氏の耳に這入つたためだらうと思ふ。併し事実は僕の云ふ通りなのである。」という挿入文が草稿上部欄外に書かれている。そこへさらに挿入する形で、左欄外に「併し仮に僕の主題歌が間に合はないから西條君に頼んだといふ事実がほんたうだとしても、それは映画会社の弁解にはなつても、レコード会社が再び僕に無断で西條君の主題歌レコードを出したといふ事の弁解にはなるものではない。」とあり、かなり大幅に手を入れている。発表形では「末弘博士は誰に聞いたものか、僕が新興キネマ（帝キネの後身）から『女給君代の唄』を作る事を依頼されながら、それを作らないので映画封切に間に合はないものだから、新興キネマで西條君に依頼したかの如く『著作権問答』の中に書いてゐられたが、それは事実が相違してゐる。」（385 頁）と簡潔に書かれており、ここでは「自己弁護」、「逆宣伝」などは用いられず、末弘が聞いたビクターの言い分と広津の言い分が異なっていることを示す内容になっている。

〔24〕「僕は新興キネマも無論不都合だと思ふ。併し新興キネマの幹部の一人が僕にその際寄越した手紙の中に、『実は新興キネマがビクター会社から協力を得てトーキーに進みたいと思つてゐるので、ビクター会社の機嫌を存（ママ）ずるわけに行かないのですから、どうか西條さんのレコードを許可してやつてくれ』というふ意味の事が書いてあつた。僕としては無論そんな両会社の関係を念頭に入れて、ビクター会社を許す必要も理由もない事ではあるが、資本の少い新興キネマが、大資本のビクター会社の機嫌をそこねたくない弱い立場にあるといふ事には、多少同情が湧かないでもなかつた。」と草稿にはあり、両会社の力関係に言及している。先にも触れたが、新興キネマに対して広津は同情的な立場に立っている。これは大資本会社に従わざるを得ない小資本会社という認識とともに、大資本会社であるビクターの行為が広津の正義に反するものであったためである。発表形では「新興キネマはビクター会社の協力を仰いでトーキーに進みたいので、ビクター会社の機嫌を損したくないからである。――併し僕が今問題にしてゐのは新興キネマではない。ビクター会社である。」（385 頁）

とされ、「弱い立場」や「同情」という表現は用いられていないが、事実上新興キネマのことは目をつむっている。結局のところ新興キネマが広津とビクターとの間に挟まれる形になってしまったようである。

〔26〕「僕は著作家達が面倒臭がらずに、この問題を徹底的に研究することを希望する。そして末弘厳太郎氏を始めとして、著作権問題に関心を持たれる法律家諸氏が、かういふ事実に対して、真の法律的解釈を与へてくれる事を希望する。」と草稿に書かれるも、発表形では紙幅の関係で端折らざるを得なかったのだろうか、「僕は日本の法律の裁きにたづねるべき決心を、終にしたのである。――それが無理であるか、どうか、末弘博士にも、もう一度考へて見て欲しいと思ふ。」（386 頁）とし、同業著作家たちへの呼びかけは削除された形である。

以上、ごく一部ではあるが草稿と発表形を抜き出して比較してみた。双方を検討してみると考えや内容がまるで異なるというようなことはないが、順序や言い回し、展開などには入り組んだ訂正が認められる。この草稿と発表形の間にもう一段階手入れの加わった逐次形草稿があったと判断するのが妥当であるように思われる[6)]。また広津の心の動きに注目すると、草稿が怒りという感情のほとばしりを形にしたものであるとするならば、発表形ではそれをさらに整理し、順序立てて、相手を論破しようとするものに改稿されていることを看取できる。が、それでも興奮は抑えられなかったようである。「怒は他人を害する前に、先ず個人自身を害する」と「怒れるトルストイ[7)]」で述べているが、広津の癇癪は自他ともに認めるところであり、ここでも怒りの矛先がビクターのみならず法曹界の権威者である末弘にも向けられている。発表形では「氏の御意見が伺へたら、甚だ幸福」あるいは「末弘氏に御教示願ひたい」とは言うもののほとんど口角沫を飛ばす勢いである。

改めて簡略に、広津の主張を発表形に沿ってまとめてみる。主題歌が広告文の領域を超えなければ「どんなに原作の筋や内容を取つてゐたつて、そんなものは著作権侵害になるものではない」。主題歌が映画の広告の域を超え、「他の会社、即ちレコード会社の利益のために発売される場合、そこに始めて著作権侵害の問題が起る」のであるというのが広津の思考である。このことを踏まえつつ広津は以下の点について司法に判断を求めようとした。

- 自分の原作から作られた主題歌なのだから原作使用の許可を得、原作料を払ったうえでレコード会社はレコードを作るべきである。
- そのプロセスを踏んでいないのだから、原作者としてレコードの発売禁止を求めているのである。
- 原作者が発売禁止を求めているにもかかわらずレコードを売り続けているのは著作権のみならず人格権の侵害でもあるのではないか。

広津は「主題歌は映画会社には広告であっても、レコード会社にはそんなものではない。それ自身重要な商品である」ということを再三述べている。「宣伝のためにやつている」といいながら自分に断りもなく、映画会社を盾にしながら利益を得ているビクターに不信を感じたので

あった。

こうした反駁に対して末弘はさらに「「著作権問答」について ── 広津和郎氏へのお答へ ──」(『中央公論』昭和 7 年 10 月号)で広津に答えている。「映画会社が映画を作る以上主題歌のレコードを作るなり、其他適当の方法を用ゐて其宣伝を行ふのは当然で映画化を許可した原作者にしても特別のことがない限りすべてそれを黙過してゐるのが従来一般の慣例」である。また、レコードと映画は別問題であるから、ビクターが直接交渉に来るべきであるという広津の理屈には合点がいかぬとして、末弘は次のような見解を述べている。二つの営利企業が「持ちつ持たれつ」の関係であるのはむしろ当然で、「相当の上映料をとつて映画化を許した以上原作者としてもそれを黙認すべき」である。レコード会社がたとえ儲けたとしても「法律上決してレコード会社の行為が原作者の権利を侵害するものとなるかを決定する標準と」はならない。問題の根源はまさに広津と「映画会社との間に締結された映画化契約にあ」り、契約を結ぶ際に何の制限も設けなかった以上は「会社は慣行上許された普通の方法で宣伝を行ふ権利を有すべきは当然」のことで、広津には「何等抗議すべき権利」はないはずだ、というものである。これ以降やりとりはなく、広津の反応、訴訟の有無・行方についても不明であり、新聞等で取り上げられた形跡もなく、全集でも触れられていない。

広津と末弘のこの論争については、夏目裕が音楽著作権にかかわる立場から「文学と音楽、そしてレコード」[8] という講義において「やはり原作者の権利というものはある」と思うと述べ、「どこまで及ぶか」という問題はあるが、「映画化を許諾する限りにおいては原作者はもう何もいえないと」いうのは「乱暴すぎる」との見方を示している。また、法律の専門家の立場で解説した大家重夫は『著作権を確立した人々』[9] で「原作の翻案権は、映画の主題歌まで及ばない」、たとえ小説の内容を数十行程度に歌詞を圧縮し「歌詞を見て、原作を想起するとしても」翻案権が及ぶとは考えにくい。「両者は切断されて」おり、歌詞は新たな創作物であるという認識を示し、末弘の考えが法律的に正しいのではないかとしている。

ただ、広津の訴えを契機としたけれども、こうした問題はどこかで必ず議論されるべきであるし、議論されなければならないと思われる。広津が著作家たちに対して「面倒臭がらずに」考えてみてほしいと草稿で述べていたが、当の著作家たちはこの問題に対してほとんど反応を示していない。ビクターの対応を疑問に思う余地がないと考えたからかもしれないし、余計なこと（広津にとっては重大だが）にかかわりたくなかったとも考えられる。つまり著作者側も慣習で済ましているのである。当然営利会社の方は組織の発展を守るために法律に抵触しない限りで、積極的に利益を生み出そうとする。それはそれで双方の関係はある程度うまくいくだろう。だが、単なる慣習のみにとどまるならば、改めて立ち返って考えてみる必要もあるのではないか。それは末弘の言うところの事前の取り決めにかかわってくる点であろうと思うが、この点については後に触れたい。

一方で、こうした権利に関する主張は時として揶揄の対象にもなり得る。人によっては広津が息巻いて著作権を主張する姿に鼻白む感じを覚えもするだろう。それではこの問題は法律を知らぬ者が怒りにまかせて起こした騒動であるとして済ませていいものであろうか。実はここにはレ

コードをめぐる心情と法律との問題だけではない、もう一つ別の側面がある。それは大資本と小資本、富める者と貧しき者といった力関係である。

> 主題歌などに著作権を持ち出してゐたら、『不如帰の唄』の辻の呼売りにも、著作権侵害も（ママ）持出さなければならないだらうといふ意味の事を云つてゐられたが、僕に云はせると、作者はそれに向つて著作権を持出したつて差支へないと思ふ。併し貧しい辻の呼売りだから大目に見てゐるだけの事なのである。それと大量生産で営利に汲々たるレコード会社とを一緒にして堪るものではない[10)]。

草稿〔24〕で新興キネマへ同情を示していたことと併せて考えてみたい。広津は果すべき義理を果たさず、利益のみを生まんとする大会社の手法を嫌悪し（法律上の是非をおいても）厳しい態度で臨む。その一方で、立場のより弱い側にあきらかな同情を示しているのである。広津が大資本という言葉に嫌悪をこめている背景には、大きな力に飲み込まれてしまうような恐れや懸念があったに違いない。実はこのビクターとの問題以前にも広津は小説「昭和初年のインテリ作家」において、著作家の権利に関する問いを同業者はじめ社会に向けて投げかけていた。広津は著作家と出版社の関係、著作家の生活における弱点を剔抉しようとしたのであった。

昭和５年４月『改造』に掲載された「昭和初年のインテリ作家」[11)] は、大正 15 年から昭和５年まで広津が居を構えていた荏原郡馬込村を舞台として、他の文士たちとの交流を題材としたものである。馬込村に住む小説家や詩人たちとの日常を描いたスケッチ風なもので、登場人物のモデルとなっているのが一体誰であるのか、馬込村の文士を知る者であればほとんど容易に見当がついてしまう。いわゆるゴシップ小説とも言えるのだが、広津が描きたかったのは文士のゴシップではない。馬込村の土地と人とに愛着をもっていたことはその書きぶりにも滲んでおり、それだけに他を貶めるつもりはなかったはずである。ただ広津の場合、モデルの問題が常につきまとうのではあるが。ともかく広津が最も力点を置いたのは文士のゴシップとは別の、ある出来事であった。その象徴的一場面をかいつまんで説明する。

広津自身がモデルであると思われる文士、北川は、これまで小資本であったある出版社が経済的変動で大資本となる場合、著作家はその出版社に隷属する立場の労働者に成り下がるのではないかと考えた。廉価で大量に生産、販売された出版物（いわゆる円本）で儲けた出版社の印税が不当なほどに低いことを思い起こして、対抗措置を講じるために小説家たちの属する芸術協会に問題を提起、共に出版社に対峙し、著作家の報酬と協会の経済基盤の底上げを図ろうとする。しかし本来ならば味方であるはずの委員たちからは提案を拒否されてしまうのである。出版社の機嫌を損ねたくないという協会の日和見主義に憤り、北川は勢いのまま飛び出してしまうが、なぜもっと根気よく説得しなかったのかと、今度は自分のこらえ性のなさを責めるのであった。

さて大正末ごろの印刷技術の飛躍的向上と読者の増加は、出版の大衆化と規模の拡大に結びついた。これまでの出版のあり方とは天と地ほども異なり、その結果いかに多くの読者を抱えこめ

るかが出版社の関心事となるのは明白である。このような出版界の風潮は著作家たちにとっても重大な問題であるにもかかわらず、彼らはそこに目を向けられない。大資本となった出版社の儲けはますます拡大していくのに、当の著作家は取り残されるのみである。もっと自分たちの生活に目を向けるべきであるのに、なぜ利益を守るために主張し動かないのか。このことを率直に疑問に思った広津は「昭和初年のインテリ作家」を著したのであった。その旨を同小説と対のものとみなされるべき評論「文士の生活を嗤う」（『改造』昭和５年７月号）[12] で明らかにし、さらに「これは総て事実」を書いたものだとして次のように述べている。

> 私はこの小説が所謂文壇を形造っている文士諸君から、どんな反響を受けるだろうということを、興味をもって待っていた。何故かというと、近頃経済的に圧迫されて来ている文士の生活に取って、切実な問題であった筈のものだからである。

ところが予想に反して、他の作家から寄せられた「昭和初年のインテリ作家」への批評はどれも主人公の無気力等に関することで、広津がもっとも期待していた「切実な問題」について発言する者はなかった。たとえば「どこか疲労したやうな感じがし、何処まで歩いて行つても解決がない。（略）氏には余りに多くの懐疑と、行為の直ぐうしろから迫つて来る反省とがある。だからいつになつても構成が生れず、実際家になれない」（土田杏村「マルクス主義文芸の清算 文壇時評」『祖国』昭和５年５月号）、「広津氏のインテリゲンチアなる観念が、あまりにも感傷的ではないか。（略）昭和初年のインテリ作家があのやうな病状を呈してゐたといふことは、それはかれらがインテリとしての資格を疑はれるのだ」（阿部知二「四月の小説」『三田文学』昭和５年５月号）といったものである。

広津は「昭和初年のインテリ作家」における試みは文学的な出来云々ではなくて文士がいかに自らの生活に無頓着であるのかを見てもらいたかったのであって、皆見当違いな点を批評で取り上げているというのだが、しかし小説というジャンルでこのような反応が起こってもある程度は無理もないようにも思う。

渋川驍は全集の「解説」で「昭和初期の文士生活における問題性を示す作品となっていることは、間違いないだろう。しかし、なにぶん戯画性のため表面的な軽い面白さが流れていることが、その問題性にあたえる効果を弱くしているように見える」[13] と同作を評している。

とはいえ、自分たちに直結する「切実な問題」についてはさして注意を払わず、主人公の無気力な性格のみをあげつらっていることに広津がいら立つ気持ちもわからぬではない。自らの思惑とは異なった反応に対して、広津は失望の色を隠さない。こうした同業著作家たちのことを「所謂文士気質」と評し（「文士の生活を嗤う」）、自分たちの置かれている生活にてんで目を向けていないと嘆く。

> この人々はどんなに食えなくなったって、「生活」のことは口にしない人種かも知れないという気がした。観念的には社会経済問題についていろいろな事を云うが、実際に自分達の具

体的問題になって来ると、何の意見をも持っていない人種かもしれないという気がした。

（略）

出版社の機嫌を損じたくない点が、長いものには巻かれろ式な日和見主義が、随分ある事を否定出来ないと思う。世界が狭いだけに、失業を恐ろしがるための妥協と沈黙とが、彼等を支配している事を、否定出来ないと思う。

また広津は二葉亭四迷を引き合いに、自らの実行性を説く。「実行生活」者たる二葉亭が「浮雲」、「其面影」で弱く、実行力の乏しい登場人物を描いたことは「実行家を志していた二葉亭の自己反省」であり決して自己矛盾ではないとし、「昭和初年のインテリ作家」を著した自らを「ああ云う主人公をああ云うように書いたという事は、作者たる広津和郎が多少とも実行的な事を、他の文人よりも考えるから、ああ云うように書くので」と言い、現実問題である生活についてはさて置いて、主人公である無気力なインテリ作家は結局何も変えることができないとの批評を繰り広げた批評者の側を「実行的な事を何も考えない連中の方が、却って強い事を云っていられる」のだと評した。榎本隆司は「昭和初年のインテリ作家」をめぐる一連の批評と、「文士の生活を嗤う」でそれらの批評を一蹴した広津とは異なった視点に立っているのであって、両者の視点にずれが生じていることを指摘している。

主人公や作者の無力を指摘する世評の視点は、主人公の挫折により、けっきょく出版大資本に対して働きかけるなんの力も生まれなかった、という見方であり、反論する広津の視点は、その力を生むためにまず賛成し、協力して起ち上ることが必要であるのに、それをしない文壇人の無気力さを指摘するところにあったのだ。すなわち世評の立脚点は出版大資本の告発というところにあり、広津の立場は、最終的にはそうなるにせよ、直接的には、あくまで、無気力な、卑怯な文壇人を告発するところにあった、ということである[14)]。

確かに広津の批判の矛先は、出版界よりもむしろ同業者の集まりである文壇に向けられていることが「文士の生活を嗤う」において看取される。「昭和初年のインテリ作家」を著し、ほんの幾人かでも興味なり賛同なりといった反応を期待していた広津としては、文壇をなんとか動かしたいという気持ちであったのだ。ところがここで障壁となったのは文壇そのものというよりもむしろ文壇に属し、文壇を組織している著作家の一人ひとりであったと言っても過言ではない。だが彼らとて、自分たちの生活が向上することに本来ならば否定的なはずはあるまい。それだのに「昭和初年のインテリ作家」はそのきっかけとなり得なかった。これは必ずしも広津や北川の無気力のせいではないように思われるのである。ここで気づかされるのは、文壇の、組織の意思というものがどこで決定されていくのかということである。文壇が彼らをそのようにするのか、彼らが文壇をそのようにするのかはにわかには判断できない問題である。確かに文壇を形成しているのは著作家たちであるのだが、文壇が彼らに対して持つ力、与える影響は決して小さいとは言えない。加えて、組織対組織における力関係も発生してくる（ここでは出版社対文壇である）。

したがって著作家は自分たちの生活の向上を目指すことよりも、食いはぐれのないようにこれまでの体制を維持しようという従来どおりの方針をとったわけである。自衛の策という点では、広津も文壇も双方の立場でその利益を守ろうとしたと言えなくもない。皮肉にも出版社あるいは出版界全体と文壇とは、広津が是正を求める「組織」としては同じものであった。

生活者たる広津に目を向けると、社会主義の考え方に影響を受け、一定の理解を示していることがわかる。プロレタリアの同伴者としての広津については、宮本顕治が評論「同伴者作家」で取り上げたことをはじめ各所で論じられている。ただ広津が思想において揺れを感じているのは明らかで[15]、そう簡単に片づけられる話ではない。プロレタリア的理想に興味を示し共感も覚えるが、あくまで同伴者の域を脱しはしない。

> 彼がプロレタリアとの体質的な距離を感じながらも、プロレタリア運動に強い関心を寄せていた事は「探海燈の下を」の中の革命家の言葉 ―― 「自分を本当に護るという自覚からの団結……それが必要なんですよ」[16] という言葉からも明らかに察せられる[17]。

プロレタリアが広く第四階級、民衆の生活向上をスローガンにしていたのに対し、まず自分自身の生活に照準を合わせることが広津にとっての最大の関心事であった。しかしながらこうした広津の態度は「小市民的自我固執の態度」と見られ、プロレタリア全盛の当時には受け入れられなかったと橋本迪夫は指摘している。

広津が生活にこだわる一端は広津自身の生い立ちや事業の失敗にも起因するものであることは間違いない。小説家としてすべてを出し尽くしてしまった[18] という父柳浪の、筆を折ってからの経済的困難が広津に与えた影響は決して小さくはない。さらに『広津和郎全集第十三巻』に記載されている年譜によると、大正 12 年の項に「『美貌の友』で小一万の印税が入り、直木〔三十五・引用者〕の人間社で働いていた上村益郎の勧めもあって出版事業を考え始める。『武者小路実篤全集』の刊行を企て（略）４月、渋谷道玄坂に上村との合名会社芸術社を設立し、その代表社員になった」とある。しかしその後芸術社は経営が傾き、「刊行成績は不良で武者小路氏に迷惑をかけ、自身も窮乏のどん底に落ちる」と続く。それから昭和４年「この年、芸術社の負債の償還や、兄夫婦の面倒を見るため、麹町区三年町二番地に大森書房を設立、『日本将棋大系』の刊行を企て、再び失敗[19]」。こうした経済的苦難を経験し、同年 11 月に改造社から『現代日本文学全集』第四十八巻『広津和郎・葛西善蔵・宇野浩二集』が刊行されたとある。失敗に続く失敗を経て、同時期に出版された円本の印税、昭和５年８月から同７年２月『婦人公論』に「女給」を連載し好評を博したことで何とか生活を立て直したのであった。

こうした経緯は、生活についての一個の考えを広津に持たせることになったと言えるだろう。自分を守るということが広津個人の問題でなく、自分を中心とした周囲の者たち、家族を守ることにも繋がっていくのである。広津の事業における躓きは、彼の周囲や家族を苦しめたことは疑いようもない。しかし不本意にも周囲を巻き込み、苦しめている事実こそが広津の精神的重石となったのであった。奇しくも事業主として従業員を食べさせていく立場と、著作家として原稿料

や印税で自分および家族を養う立場という両方に立つこととなったわけである。また他方では、資本を拡大しつつある出版社が安い印税で、廉価で大量に売りさばく形式の円本の発兌があった。爆発的に売れた円本ブームに助けられたとはいえ、著作家の原稿料および印税はできる限り据え置いて、莫大な利益を生みだしている出版社に広津は疑念を抱き、何らかの行動をとるべきだとの考えに至るのであった。だが「自分を本当に護る」ためには著作家一人ひとりが自分たちの生活を守るために協力する必要がある。利益によって大会社となった出版社等に一人で立ち向かうことの困難は想像に難くない。会社組織に対峙するには著作家もまた組織として足並みをそろえなければ、交渉の余地もないことは明らかである。生活者たる市民の意識を著作家がもち、今や巨大な資本を持つ出版社等と渡り合っていく必要があったわけである。

> 小説家を父に持った私は、硯友社時代からの文壇を見、その中で呼吸して来た。つまり尾崎紅葉時代から代々の文壇を見、その中で呼吸して来たわけである。私は時代時代によって、新作家達が擡頭し、それが又凋落して来たのを見ている。が文士達のそういう有様は昔も今も変りはない。擡頭して名声とそれから少しばかりの物質的自由とを得て、非常に得意になっているかと思うと、直ぐ次の時代から追いまくられる。追いまくられた時分になって、彼等は丁度社会的には責任の重くなる年頃に達するのだ。そして生活的に一方ならぬ難渋に陥るのだ。代々が同じ繰返しである。（「文士の生活を嗤う」）

文士たちを取り巻く状況、生活そのものがいかに旧態依然であるかを体験的に知っていたのであった。「運も不運もアテガイブチ」、「食えるも食えぬもアテガイブチ」、「自分等の生活を人まかせ」にしてしまいがちな文士の悪い癖が、文士自らの生活苦を拡大しているのだとも悟っていた。つまり「文士気質」を問題の根幹と見ているのである。こうして柳浪の傍らで文士たちの盛衰を見、実際家としての広津の人格形成がなされたのである。小説をはじめとした文章を著す以外の、殊に利益に関することを云々するのは文士の気概からは憚られたのであろうが、広津から見れば単に問題を次の世代へ先送りしているに過ぎなかった。

広津は「昭和初年のインテリ作家」で、北川をして次ように語らせている。仕事をするため伊豆の温泉地に出かけた北川と須永は、時々付近を散歩しながら土地の人々を観察するのであった。

> 「どうだい、あすこに下駄屋のおかみさんが昼寝をしているじゃないか。赤ん坊に添乳をしてさ。あの昼寝をしている、安心しきった顔を見給え。（略）何と人生を知っているという顔をしているかを。（略）ああいう人間が、俺達よりもずっと知っているんだよ。 ―― 我々は十年も二十年も前から、人生について考える専門家のような顔をしている。（略）そして成長するにつれて、自分の行く道は、人生を端的に知る方面にあると考えたものだ。そこで最も端的に人生を知る道 ―― 文学というものを選んだのだ。（略）ところが、一体何処に人生を知ったんだろう。（略）一番必要なもの ―― それが俺達には悟れないからだ。 ―― 実際文学者というものは、一番生活の解らない、迂回ばかりしている人間かもしれないよ」

（略）

「何と云ったって、気になっているのは、金のことだからね。それに支配されないようなつもりでいるが、併し実際神経が支配されているのは、それだからね。── それがなかなか我々には気のつかない点なのだ。君も早く仕事をして、こないだ君が建てた湯殿の代など、大工に払ってしまい給え。そうしたら、何とさっぱりするか解らないから。俺も早く仕事をして、書けない間のこまかい負債などみんな払ってしまおう。── そしてさっぱりすることだ。── これだけの事を毎日おろそかにして、何が人生の端的了解だ！」

（「昭和初年のインテリ作家」）

日々をきちんと過ごし、一つひとつの問題を片づけていくこと。「甘い空想」などせず、借金をこまめに返していくこと。これらを実行する必要性を須永に説き、おしゃべりを切り上げて仕事に取り掛かるのであるが、結局二人の仕事は遅々として進まない。時間ばかりを徒に空費していくのである。著作家にとって「これだけの事」を実行することがすでに容易ではないことを示唆する。それでも日々の生活は待ってはくれず、そうこうするうちには彼らを圧迫しさえする。だが著作家が自らの生活を立て直すには、やはり自らの著作によるほかないので、これではまったくの堂々巡りである。つまるところ、著作家が協会に納めるべき積立金を払うだけの金銭的余裕すらないのは、協会が会員の葬式代を出すのにも容易ならざる状況とそのまま符号していく格好である。著作家の手にするマージンが増えるのなら、協会に積み立てる金ができて協会も盤石、万が一「書けない間」も生活を成り立たせることができるのでは、と、こういう考えが北川にあり、そうしてそれは広津の考えでもあった。

一方で、これは広津だけに限らないが、いわゆる芸術を志す者にとって、価値ある作品に物質的充実や精神的安定が必ずしも伴うものでないのは言うまでもない。間宮茂輔は芸術社の負債で逼迫していた頃の広津を引き合いに「苦しみや悲しみに堪えているとき、何かに責め立てられているとき、大きな刺戟をうけとめているとき、一言にいって平板でない状態のなかで抵抗がつづくような場合の広津は、風波のないときにくらべてはるかに充実した作品をかいている[20)]」と評している。経済的不安は誰にとっても好ましいことではないので、先から述べているように著作家についても例外ではない。けれども経済的不安が取り除かれ生活に心を砕く必要がなくなることと、小説の文学的価値とは同次元では語れないのかもしれない。小説を生活に密接した芸術だと考える広津の、「人間の生きている現実世界を対象とし、苦しみ悩みながら、而もそれを全的に観照もし、そこに一種の芸術的気分を見出して、苦痛と又それ故の或種の味とを味わいながら、行くところに、小説家と云う芸術家の、芸術界に於いて占めるべき分野がある[21)]」という考え方からも察しられるが、確かに「平板でない状態」が著作家をはじめとした芸術家に与える影響は頗る大きいと言わねばならぬ。

ただ、人生の苦しみは経済的要因を除いても尽きることはない。たとえ経済的な問題から解き放たれたとしても相変わらず存在する苦悩はいくらもあろう。ともかくも、出版社が獲得する莫大な利益と著作家が受け取る報酬との隔絶、それに気づいて訴えていかなければ著作家の生活は

向上しないままであるということに目を向けたのが広津であったのだ。

ふたたび、「主題歌は広告文か」について考えてみたい。ビクターと広津との諍いに端を発し、末弘厳太郎と広津の論争に発展したこの問題は、広津自身の経済的困窮、円本ブームにおける利益をめぐっての出版社と文壇に対する不信感、これら一連の流れの中で起こるべくして起こった事件だと言ってよい。おそらく主題歌にまで著作権が及ぶか否かについて、末弘の説を打ち破ることは難しいだろう。しかし著作家の生活という視点に広津が立っていたことは事実であり、円本を売り出した出版社、何万というレコードを売りさばいたレコード会社といった大資本の会社に対して、生活に重きを置く一著作家として取るべき態度を取ったと見做してよいのではないか。末弘の云うように法律的には「何等抗議すべき権利」をもたないとしても、どこか著作家が置き去りにされているという感は否めない。広津の疑問はまさにそこにある。もちろんそうした訴えが結実したかどうかといえば、「昭和初年のインテリ作家」での広津の主張が当時ほとんど顧みられなかったことからもうかがえるように、決して広津の満足するところではなかった。
ただ、いささか逆上気味の論争を末弘との間に繰り広げることにはなったが、末弘が「著作権問答」で述べていることは広津の考えとまったく相いれないものだとは思えない。以下は末弘の見解である。

> 出版者の方では「先生々々」と崇め奉るし、著者の方では又大様に「万事然るべく」と一切を任せつ切り。だから万事が大まかな者ならば兎も角、今のように出版者も勘定高くなり著者の方も自然商売気を出すやうになると、後から問題を起こすのは当然です。だから著者なり出版者なりが後に問題を起こさないやうにしたければ、初めの契約で万事をはつきり決めて置くやうにするがいゝと思ふのです。それだけの用意を怠つて置きながら後からとやかく言つても法律上どうにもならないのです。
>
> （中略）
>
> 私の考えでは今のやうな世の中になつた以上、出版者も著者も契約書によつて予め互に権利関係を明確にして置くべきだと思ふし、国家も亦出版契約法を制定して当事者契約の足らざる所を補充し得るだけの用意をして置くべきだと思ふ。さうしてこそ初めて出版者も資本主義的原理に即した合理的な経営が出来るし、著者も亦安心して出版を任せることが出来るのだと思ふ。

この点について、広津は反駁文で言及していないが、先の「昭和初年のインテリ作家」で北川が協会に提言しようとしたことと重なってくるのではないか。惜しむらくは、こうした考えが著作家、文壇にまで波及しなかったことである。

さて、「著作家達が面倒臭がらずに、この問題を徹底的に研究することを希望する」と草稿で書かれながら、発表形では省かれたこの一文が思い出される。単に紙幅が足りなくなったためか、あるいは広津の癇癪とみなされることを厭うたのか、はっきりとはしないが、発表形でこの一文

が省かれてしまったことは多少心残りと思えなくもない。ともかくも末弘との論争が他に飛び火し、そこで新たに議論が交わされるほどのことはなかったのである。出版社にせよ、レコード会社にせよ、対著作家との関係に横たわっているのはある意味では同質の問題で、本来そこに対抗すべきはずの文壇は、組織的力関係においてはすでに屈服してしまっているのであった。表向き「先生々々と崇め奉」られているとしても、その実、力関係で足元を見られているであろう文壇を、著作家たちが結束し毅然とした態度を示すことで取り戻していけるチャンスでもあった。

立ち返って考えてみると、確かに広津は、まず自らの生活を出発点とした。だがそれは決して自らの生活のみに留まる類のものではない。そのことは押えておかねばならないだろう。無気力なインテリゲンチャの奥底に見えるのは、時代の変化、あるいは社会の変化を的確に読み、屈することなく生活をまっとうしようとする生活者の気概である。

注

1) 『広津和郎全集第十三巻』（中央公論社 1974 年 11 月初版発行、1989 年 6 月普及版発行）の年譜によると「「主題歌は広告文か」（のち「末弘博士の『著作権問答を駁す』と改題)」を書くとある。

2) 「女給 君代の巻」の主題歌「女給 君代の唄」は中山晋平作曲・西條八十作詞で新興キネマから発売された。

3) 「著作権問答」と題して『中央公論』（昭和 7 年 8 月号）に掲載された。

4) 「『女給』主題歌で訴訟さわぎ」（『東京朝日新聞』昭和 7 年 8 月 20 日朝刊）によると、新興キネマ宣伝部の言い分は次のとおりである。「原作者自身の出来があんまりおくれたため更に西條氏に頼んだのですが西條氏の方が先に出来たためこれをビクターで吹き込んだのです、ところがその後になつて広津氏の歌が出来て来ましたためこれはポリドールで吹込みました、広津氏の方からはビクターの歌は主題歌として認めないからといつて来ましたが私の方としてはこんなめんどうなことにならうとは思つて居ませんでした」。広津作詞の歌が別会社で録音されたことがわかる。

5) 夏目裕は「文学と音楽、そしてレコード」（『レコードと法』1993 年 11 月 青山学院大学法学部）で、西條八十のはじめて手掛けた映画主題歌「東京行進曲」（菊池寛原作『東京行進曲』）を例にあげ「とにかくヒットしそうな歌をつくってください、それを映画の主題歌として使いたいということで、日夏さん〔耿之介・引用者注〕のご縁で、西條先生にお願いをしました。日活は、菊池寛の小説が終わる前に映画をつくってしまいました。映画はもちろん菊池寛原作ということでやったわけでございますが、西條先生は、全く原作と関係のないものでいいのであれば、東京のモダンな風俗を書いてみようかなということで「東京行進曲」をおつくりになった」と述べている。

6) これについて独自に追加調査したところ、大田区立郷土博物館に所蔵の当該自筆稿とは別に、神奈川近代文学館に別段階の関連自筆稿（断片、全 6 枚）が所蔵されていることが判明した。これを調査したところ、少なくとも雑誌発表形に至るまでには以下のごとく三つの段階があったことが確認できた。
   - 第一下書稿（名称不明原稿用紙）
   - 第二下書稿（松屋）
   - 決定稿（コクヨ）

   大田区所蔵のものは、第二下書稿にあたると考えられる。また、神奈川近代文学館所蔵の原稿は、第一下書稿および決定稿の一部である。

7）「怒れるトルストイ」（初出『トルストイ研究』大正 6 年 2 月号～ 3 月号）引用は『広津和郎全集第八巻』（1974 年 2 月初版発行、1989 年 1 月普及版発行 中央公論社）を用いた。

8）前掲「文学と音楽、そしてレコード」におなじ。

9）大家重夫『著作権を確立した人々 —— 福沢諭吉先生、水野錬太郎博士、プラーゲ博士… ——』（平成 15 年 5 月 成文堂）

10）この引用は発表形によるもだが、草稿〔9〕～〔10〕にもこれとほとんど同じ文があることを付記しておく。

11）「昭和初年のインテリ作家」（初出『改造』昭和 5 年 4 月号）、以下引用は『広津和郎全集第二巻』（昭和 49 年 6 月初版発行、昭和 63 年 7 月普及版発行 中央公論社）による。

12）「文士の生活を嗤う」（初出『改造』昭和 5 年 7 月号）、以下引用は『広津和郎全集第九巻』（1974 年初版発行、1989 年 2 月普及版発行 中央公論社）による。

13）前掲『広津和郎全集第二巻』所載の渋川驍による「解説」。

14）榎本隆司「広津和郎 —— 作家と実行者のあいだ ——」（『日本近代文学』1972 年 5 月）

15）間宮茂輔は、昭和 4 年ごろの広津の様子をプロレタリア文芸評論家である青野季吉から聞いたという。「青野の話によると、広津は当時しばしば青野と会っており、特に《三・一五事件》以降の《左翼陣営》の様子や、軍部・右翼などの動きについて、青野のことばを借りれば《子供っぽい真剣さ》で訊いていた」と述べている。熱心な広津の様子に気付いた青野が、『文芸戦線』に参加したらどうかと打診するも、広津は「団体生活」には向かないからと言って断わったという。引用は「広津和郎 この人との五十年」（1969 年 12 月 理論社）による。

　また、広津は評論「政治的価値と芸術的価値」で「私は現在プロレタリアートのぼっ興期に、芸術史的見方を無視し、極端に政治的立場からのみ芸術を見ようとする議論の横行するのを、時代的現象として、一応是認する。しかしその極端な議論は、やがて妥当なところまで、みずから引退ることを信じている」（初出『朝日新聞』昭和 4 年 9 月 17 ～ 18 日）と述べている。芸術が「功利主義」によって進められ、影響を与えられるものであることはもはや疑うべくもないが、今や芸術が「功利主義そのものゝ一手段にしか」過ぎないという考えが「余りに横行し始め」ていることを危惧している。引用は前掲『広津和郎全集第九巻』による。

16）「探海燈の下を」（初出『新潮』昭和 4 年 10 月号）は前掲『広津和郎全集第二巻』に所収。

17）橋本迪夫「広津和郎 —— 特に昭和初期の活動について ——」（『国文学 解釈と教材の研究』昭和 35 年 12 月）

18）「年月のあしおと」（初出『群像』昭和 36 年 1 月号～ 38 年 4 月号）等、各所で柳浪について語っている。

19）「広津がまた出版をやりだすらしい……という噂をきいたとき、わたしは広津に失望した。というのも、出版にたいする広津の能力は、武者小路実篤全集でわたしにはわかっていた。（略）そのうち広津のはじめる出版は『日本将棋大系』とかいう全集で、社名は大森書房といい、菊富士ホテルの一室を事務所にして」広津の兄俊夫らと共に仕事を始めていた。将棋が流行していることに目を付けたものの、うまくいかなかったようである。引用は前掲『広津和郎 この人との五十年』による。

20）前掲『広津和郎 この人との五十年』におなじ。

21）「有島武郎氏に与う」（初出『表現』大正 11 年 3 月号）、引用は前掲『広津和郎全集第八巻』による。

馬込文士村資料から見る吉田甲子太郎の一側面

田　嶋　彩　香
実践女子大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程

１．吉田甲子太郎とは

“馬込文士村を語る上で、欠かす事の出来ない人物は誰か”と聞かれたら、筆者は迷わず吉田甲子太郎の名をあげる。室生犀星や宇野千代、北原白秋ら著名人たちの影に隠れ、あまり光をあてられない存在ではあるが、馬込文士村と甲子太郎の関係性は、もっと光をあてるべきだと考える。

馬込文士村資産化事業の記念すべき初仕事は、甲子太郎の蔵書整理だった。作業に参加した全員が、その点数の多さに圧倒されながらも、甲子太郎の“有り難いホコリ”の洗礼を受けた。そのためか、甲子太郎の存在は、今も強烈な印象と共に重要な存在として、筆者の中に残り続けている。

甲子太郎は、父吉田三郎助、母らくの４男として、明治 27 年[1] 群馬県北甘楽群に生を受ける。出身地に関しては、群馬説と東京説の２説あるが、はっきりとした事はわかっていない。彼の出身地を、神宮輝夫は〈東京生まれ〉[2] とし、滑川道夫は〈群馬県北甘楽群〉[3] としている。また、滑川は出身地に関して次のような事を言っている。

> わたしの手もとにある作者自筆の経歴書は、東京芝桜田小学校高等科二年修了から始まっている。群馬県北甘楽群に生まれたが、幼児期に一家上京したため、群馬時代の記憶はないという。上京時の汽車の窓に電線が上下に動いていたことだけが記憶にあるという。
>
> 「二　筆名時代とアンダスン研究」[4]

滑川は〈幼少時のことは語ってくれなかったから、筆者にはほとんどわかっていない〉[5] と続けているが、この覚書は、甲子太郎の出身地を明らかにするための、１つの大切な手掛かりであることに違いない。[6]

甲子太郎は、東京に移住後、東京芝桜田小学校高等科、私立立教中学校を経て、早稲田大学英文科へ進む。文学青年だった彼は、中学時代は“杉亭”の俳号で同人雑誌『螢光』を主宰し、大学時代は、回覧文芸同人雑誌『地平線』および『平原』を作成する等、青春を文学の中で過ごした。

大学卒業（大正７年）後、母校である立教中学校の英語教諭になってからも、その文学熱が冷める事はなく、文芸同人雑誌『基調』に参加する等、小説や句作、翻訳に力を入れた。ちなみに、彼の処女作品は、『基調』の終刊号にて発表された〈私小説ふうな「ばななの皮」〉[7] である。翌年の大正８年、加藤咄堂主宰編集『新修養』にて 30 枚程の短編私小説「小事件」を発表。その

稿料として 10 円を受け取った喜びを〈もらった稿料に金を足して Webster の辞書を買った。この辞書は今でも使っている〉[8] と記している。

甲子太郎が、教職を辞め、本格的に物書きとして生き始めたのは、大正 11 年 9 月、28 歳の時だった。英米文学の翻訳に専念することが目的だったという。物書きに転身する一つのきっかけとなったのが、雑誌『鉄槌』の仲間達の出会いである。

> この同人のなかに推理小説『新青年』（博文館、大正九年一月創刊）系の人びとがいたため、英米の探偵小説（推理小説の名称は昭和二一年に初めて用いられた）を訳出することになった。『新青年』の編集長だった森下雨村が積極的に海外作品の紹介に力をいれはじめた時期にあたっていた。日本の推理小説の開拓期でもあって、江戸川乱歩の登場ではじめて、専門作家が出現するし、新進作家が続出する時期にあたっていた。かれは、この勢にのって、新しい作品を訳出しはじめる。かれにとって翻訳時代が探偵小説から開幕された。作品は『新青年』に発表されている。　「二　筆名時代とアンダスン研究」[9]

翻訳の仕事をはじめてから、ある程度の稿料が入るようになったとはいえ、当時の暮らしぶりは“物書きとして難無く生きている”とはお世辞にも言えないものだった。しかも、大正 10 年三浦周子と結婚をし、すでに家庭を築いていた甲子太郎には、なおのこと言えるはずがなかった。当時の様子を自筆の略歴の中で、〈なんでも書いたが食えるようにならない〉[10] と、こぼしている。

昭和 7 年 3 月、明治大学文藝科の教授兼幹事就任を契機に、ようやく生活が安定するまでの間、甲子太郎は翻訳の仕事をはじめ、さまざまなジャンルの小説を書き続けた。貧しいながらも物書きとして苦悩の時代を生き抜いた彼は、その後、児童雑誌「銀河」の編集を代表とする児童文学や、教科書編纂を中心とする国語教育の世界でも活躍し、日本の子供たちに大きな影響を与えた。

しかし、その功績を知る者は、思いの外少ない。世間の関心は、師匠である山本有三や、『日本少国民文庫』編集を共にした岸田國士、石井桃子、吉野源三郎、高橋健二、児童文学の世界で活躍し甲子太郎とも交流のあった小川未明や浜田広介らに向けられ、甲子太郎の存在は、華やかな彼らの影に隠されてしまっている。前の方でも少し触れたが、馬込文士としての甲子太郎も、世間にはあまり知られていない。“器用貧乏”とは、まさに甲子太郎の事を言うのだろう。

２．甲子太郎と山本有三

甲子太郎を語る上で、山本有三の存在を忘れることはできない。２人の関係は、大学卒業間近の甲子太郎が、有三の戯曲にひどく感動し、有三を訪ねたのがはじまりである。以後、有三は何かと甲子太郎のことを気にかけ、さまざまな場面で彼の力となった。

有三の面倒見の良さは有名な話だが、甲子太郎もその恩恵を受けた１人である。教授の道も、児童文学の道も、国語教育関係の道も、すべて有三の導きにより甲子太郎は歩む事ができた。甲子太郎にとって有三は、“物書きとして生きる道”を大きく切り開いた人物であり、有三の存在なくしては、甲子太郎の物書き人生は開花しなかったと言っても過言ではない。まさに、“人生

の師”と言うべき存在である。

大田区立郷土博物館資料の中にも、師弟関係の良さを物語る書簡資料が存在する。例えば、甲子太郎の作品解釈に対し、有三が指導を入れる書簡である。この類の書簡は、多数存在したように記憶しているが、特に筆者の中に色濃く残っているのは、大正３年９月頃の書簡である。この書簡は、吉祥寺の山本有三邸から馬込の吉田甲子太郎邸に送られた書簡である。消印の部分が封を切る際、半分以上失われていた為、消印の日付を読み取ることのできない書簡だが、年月の〈３．９〉は読み取ることができ、封筒の裏面にも有三の筆跡で〈九月十九日〉と書かれている事から、“昭和３年９月 19 日前後”の消印であろう、と推測をした。

また、書簡の本文に着目すると、〈襲子〉という名前が出てくる事に気づく。これは恐らく、有三の小説『波』に登場する“野々宮襲子”をさしている。『波』が朝日新聞に連載されていたのは大正 12 年、単行本として発売されたのは昭和２年である。これらを踏まええると、〈３．９〉を“昭和３年９月”と読む事に問題はない。[11)]

この書簡には、甲子太郎の『波』の解釈に対する有三のアドバイスが書かれている。有三らしい言葉遣いで、“りんご”にたとえながら甲子太郎を窘めている部分も見受けられ、甲子太郎の事を良く知る有三だからこそ、書くことのできる内容に、思わず笑みがこぼれる。甲子太郎の人となりを知る資料としても、甲子太郎と有三の師弟関係の良さを物語る資料としても、貴重な書簡である。

他にも、有三が甲子太郎を信頼している事が伝わる書簡がある。明治大学文藝科が存続の危機を乗り越えた際（昭和 19 年）、有三は活動に尽力した甲子太郎らに対し、労いの手紙を送っている。その内容は、まるで我が子を愛でるように、彼らの功績を褒め称え、弟子の成長を心から喜び涙する有三の様子が、目に浮かぶようなものである。

また、面倒見の良い有三先生らしさを確認することのできる書簡もある。有三が長篇小説『女の一生』（全 228 回）を朝日新聞（東京・大阪）に連載していたのは、昭和７年 10 月 20 日から昭和８年６月６日である。紹介する書簡は、この連載が始まってまだ間もない昭和７年 11 月上旬のものである。そこには、甲子太郎の評言を受け止め、今後の執筆に活かしていきたいといった内容に加え、『女の一生』の執筆が、今までにない位スムーズに進んでいる事が書かれている。恐らくこの書簡が送られる少し前辺りに、モーパッサン作『女の一生』と有三の『女の一生』を比較読みした甲子太郎が、その旨と比較考察の結果を、書簡等の手段を使って有三に伝えていたのだろう。この書簡はそれに対する有三の返答である。

続けて有三は、大学に行けない自分に代わって、学生たちを“歌舞伎”に連れて行ってほしいと甲子太郎にお願いをしている。そこには、古典を鑑賞する機会を学生たちに与えたいという有三の思いが込められており、有三の面倒見の良さ、学生達へのあたたかさを再確認できる書簡だと言える。

これらの書簡を見るだけでも、甲子太郎と有三の親睦の深さを充分確認できる。紹介した３点の書簡を含め、有三が甲子太郎に送った書簡の多くに、“〇〇君によろしく”“〇〇君に〇〇を頼んでおいてくれ”“〇〇君の住所を教えてくれ”といった言付けが書かれている。これは、甲子

太郎が有三から厚い信頼を寄せられていた事のあらわれであり、彼が有三門下の中で中心的ポジションに置かれていた事を意味していると言えないだろうか。馬込文士村の中でも、甲子太郎は“村長”（愛称。実際の村長は別にいた。）として位置づけられ、皆から慕われていた。甲子太郎はリーダー気質の人間なのだろう。

甲子太郎は、師匠不幸にも有三より先にこの世を去った。昭和 32 年 1 月 8 日、63 歳の若さだった。甲子太郎の葬儀は、その月の 14 日、明治大学の大講堂にて明治大学文学部葬として執り行われた。その際有三は、友人代表として弔辞を述べているが、その内容は参列者の涙を誘うものだったという。有三の弔辞について、周子夫人は〈山本有三先生の／直接お言葉での弔辞を頂く／最も感銘深く伺う〉[12] と覚書を残している。

次の章では、その明治大学文学部葬関連資料と、還暦祝い資料に着目し、甲子太郎の交流関係を探っていきたいと思う。

３．甲子太郎の交流関係　―還暦祝いと明治大学文学部葬―

作家の作品解釈や交流関係、人となりを知る上で、書簡は重要な資料として位置づけられている。同様に、冠婚葬祭関連資料も、それらを知る上で重要な資料である。

前章でふれた通り、甲子太郎は著名人の影に隠された“器用貧乏”な作家である。よって、世に発表されている彼に関する資料も、彼の功績に比べたら明らかに少ない。その事が、“吉田甲子太郎”の名が世に広まらない原因の 1 つになっている。

本章では、甲子太郎を知る上で重要であろう資料として「還暦祝い資料」と「葬儀関連資料」に着目する。但し、いずれも多くの課題を抱えた資料であり、今後考察を加え、改めて論じる必要のあるものばかりだという事を断った上で、それらを紹介していく。

ａ．還暦祝い資料

まずは、還暦祝い資料から見ていく。甲子太郎が還暦を迎えたのは、昭和 29 年。還暦祝いが行われたのは、同年 3 月 23 日、参加者 134 名。[13]「吉田甲子太郎氏還暦祝賀会出席者名簿」[14] を見ると、甲子太郎の広い交流関係を知ることができる。

【表１】は、発起人全 21 名の名簿、【表２】は、当日の出席者名簿の一部である。発起人は、宇野千代や尾崎士郎 [15]、藤浦洸等馬込文士達をはじめ、明治大学関係、児童文学関係等、錚々たる顔ぶれである。【表２】の出席者を見ても、その人脈の広さが伝わってくる。「吉田甲子太郎氏還暦祝賀会出席者名簿」は、「作家関係」「学校関係」「知人関係」「出版関係」の４項目に分けられ、作成されている。【表２】は、その項目をそのまま採用し、主要な人物をピックアップし作成した。ここでは、「知人関係」の欄にある人物を中心に、少し紹介していきたいと思う。

秋田忠義は、尾崎士郎の小説『空想部落』に登場する横川大助のモデルとなった人物で、雑誌「改造」の編集にも携わり編集者としての顔を持っている。甲子太郎の母親が亡くなった際には、甲子太郎宛にお悔やみの手紙を送っている。[16] 今井欣三郎は、能楽評論家。川原信、山崎晴一は翻訳家。田坂乾は、洋画家である。【表２】には載せていないが、「知人関係」欄には他にも、

【表１】

秋田忠義	秋山孝男	石井桃子	今井欣三郎	宇野千代	大木直太郎
尾崎士郎	神吉晴夫	菅藤高徳	後藤楢根	佐藤亮一	柴田寅三
高橋健二	坪田譲治	滑川道夫	波多野完治	濱田廣介	藤浦洸
牧芳雄	村山英太郎	吉野源三郎			

【表２】

作家関係	阿部知二	石井桃子	宇野千代	岡本良雄	小川未明
	榊山潤	添田知道	高橋健二	巽聖歌	坪田譲治
	滑川道夫	波多野完治	濱田廣介	藤浦洸	舟橋聖一
	松坂忠則	保高徳藏	吉野源三郎	米川正夫	中村光夫
学校関係	青沼一郎	大木直太郎	菅藤高徳	柴生田稔	関口功
知人関係	秋田忠義	今井欣三郎	川原信	田坂乾	山崎晴一
出版関係	岡本陸人（あかね書房）	大塚光幸（朝日新聞社）	小林勇　等（岩波書店）	高村重惟　等（講談社）	神吉晴夫　等（光文社）
	佐藤亮一　等（新潮社）	秋山孝男　等（創元社）	中村新太郎　等（鶴書房）	柴田寅三　等（日本書籍KK）	牧義雄（牧書房）
	平山信義（読売新聞社）	花房満三郎（文藝春秋社）			

【参考】大田区立郷土博物館資料 no. 3783
＊表１表２、共に筆者作成。

立教学院中学校校長花房正雄や、作家の坂巻整通、長唄関係の人物と思われる岡安喜三重、岡安喜三糸の名前もある。[17)]

全体を見渡してみると、出席者の多くは甲子太郎の職業に絡んだ人物だが、能楽評論家や画家など、職業とは少し離れた場所にも人脈があることがわかる。しかし、甲子太郎の人脈の広さは、これに止まらない。それを証明してくれるのが、彼の「葬儀関連資料」である。

ｂ．葬儀関連資料

甲子太郎がこの世を去ったのは、昭和 32 年１月８日、死因は胃癌である。昭和 30 年に発病すると、以後ほとんどの執筆活動を控え療養生活を送っていた。63 歳という若さで人生の幕引きをした甲子太郎の訃報は、周囲の人々に深い悲しみと衝撃を与えた。

【死亡通知書】［体裁］葉書／ガリ版擦／縦書き

明治大学文学部長教授吉田甲子太郎かねて病氣
療養中のところ昭和三十二年一月八日午後十一
時四十五分死去いたしました。生前の御厚情を
深謝し謹んで御通知申上げます。
　　葬儀は左記の通り文学部葬をもって仏式により行います。

記

一　日時　昭和三十二年一月十四日（日）葬儀午後０時半から
告別式午後一時―二時

一　場所　東京都千代田区神田駿河台明治大学記念館大講堂

昭和三十二年一月九日

葬儀委員長　松岡熊三郎
同副委員長　唐木順三
妻　吉田周子
友人代表　山本有三

【参考】大田区立郷土博物館資料
「川口庄蔵宛書簡　昭和 32 年 1 月 9 日」no.40-1967

大田区立郷土博物館資料には、これ以外にも甲子太郎の葬儀に関する資料が数多く所蔵されている。甲子太郎の死にまつわるエピソードや書簡、弔辞や電報の中身にもふれたい所だが、今回は名前の紹介のみにとどめさせてもらう。まずは、「故吉田甲子太郎文学部葬次第」から、葬儀委員と弔辞を読んだ人物を見ていく。

【葬儀委員】

故　吉田甲子太郎文学部葬次第

葬儀委員
委員長　松岡熊三郎
副委員長　唐木順三
委　員　浅野玄府　坪田譲治　阿部知二　滑川道夫　今井欣三郎
浜田広介　大木直太郎　舟橋聖一　加藤五六　松坂忠則
白石佑光　山本有三　添田知道　吉野源三郎　高橋健二　渡辺保

【参考】大田区立郷土博物館資料大田区立郷土博物館資料
「故　吉田甲子太郎文学部葬次第」no.40-1965

【弔辞】

明治大学代表　明治大学理事長　長谷川太一郎
明治大学教職員代表　明治大学法学部理事長　小出廉二

明治大学校友会代表	服部清一
国語審議会	土岐善麿
児童文学者協会	坪田譲治
日本児童文芸家協会	浜田広介
友人代表	山本有三
明治大学文学部代表	大木直太郎
明治大学文学部学生代表	藤沢敏博

【参考】大田区立郷土博物館資料大田区立郷土博物館資料
「故　吉田甲子太郎文学部葬次第」no.40-1965

“明治大学文学部葬”として行われた式の中心人物が、“明治大学の関係者ばかり”だという事は言うまでもないが、この場合は、文藝科創設に尽力した“山本有三”の関係者が中心になって葬儀を執り行ったと言う方が妥当だろう。

太田薫	浅野玄府	片山政男	山崎晴一	今井欣三郎	徳田秀一
浜田広介	椎野英之	片山鬼作	川端康成	尾崎士郎	白井重誠
秋田忠義	與田準一	小泉源太郎	岸田エリ子	高橋健二	向坂隆一郎
滑川道夫	山川惣治	柳田達雄	岸田今日子	西谷能雄	山崎晴一
岡本陸人	中野保興	上野斌郎	大橋芳雄	巽聖歌	田坂乾
萩尾千秋	川原信	片岡並男	松岡熊三郎	大塚光幸	田坂貞雄
長野賢	平松幹夫	花房正雄	長谷川太一郎	吉田竹三郎	山下正次
吉野源三郎	舟橋和郎	吉野源三郎	長野國助	酒井朝彦	岩田豊雄
青沼一郎	室生犀星	石井桃子	関口功	村岡花子	大野信三
岩井半四郎	猪俣禮二	小出廉二	大木雄二	松坂忠則	平塚武二
阿部知二	兼田富太郎	白石大二	上野碌郎	白石佑光	後藤福根
神吉春夫	吉田三陸	水越順作	谷村まち子	佐藤一勇	小川未明
榊山潤	塚原健二郎	藤田六三郎	椋鳩十	大木直太郎	藤野順
秋山修道	藤田圭雄	菅藤高徳	高野千代	大橋芳雄	坪田譲治
小林茂	帆足秀三郎	柴生田稔	中村白葉	山川惣治	藤川能

【参考】大田区立郷土博物館資料吉田甲子太郎葬儀関連資料「香典帳」no.40‐3853
＊ 表、筆者作成

香典帳にある弔問者の名前を見ても、有三関係の人脈が多い事がわかる。これは、有三の人脈と甲子太郎の人脈が重なり合っていると解釈することも可能であり、そういう見方をすれば、この重なりは、有三と甲子太郎の関係の良好さ、親密さをあらわす１つの資料と言えるだろう。

有三関係以外の弔問者に目を向けると、還暦祝関係資料以上に、甲子太郎の広い交友関係を知ることができる。甲子太郎の職業とは少し離れた所にいる人々でいうと、歌舞伎役者の岩井半四

郎や染色家の上野斌郎、さらに弁護士の長野國助や田坂貞雄[18] がいる。職業に近い所を見ると、児童文学作家の塚原健二郎、平塚武二等。翻訳家の平松幹夫[19]、猪俣禮二、小泉源太郎等の名前がある。電報に目を向けてみると、秋田雨雀や長谷川泰子とも交流があったことがわかる。

【電報関係資料】

■昭和 32 年 1 月 10 日：吉田家宛
三木武夫　　小川未明　　学研編集部　　椋鳩十　　藤浦洸

■昭和 32 年 1 月 11 日：吉田家宛
鈴木十郎（小田原市長）

■昭和 32 年 1 月 12：明治大学宛
秋田雨雀　　末川博（立明館大学長）

■昭和 32 年 1 月 14 日：明治大学宛
長谷川泰子　　高橋里美（東北大学長）

【参考】大田区立郷土博物館資料
吉田甲子太郎葬儀関連資料「電報」no.40-3852

明治大学文学部葬として、大々的に執り行われた甲子太郎の葬儀。甲子太郎死去の悲しみは、地方新聞にまで取り上げられた。記事を書いたのは、甲子太郎を〈師と仰ぎ児童文学に精進してきた浜松市教委指導主事高橋俊雄〉[20] である。甲子太郎の葬儀後、高橋はお悔やみ状と共に自身が書いた新聞切り抜き「吉田先生を憶う…兒童文学の指導者だった…」を、周子夫人宛に送っている。その内容は、甲子太郎に対する高橋の温かい思いであふれている。

先生は酒を呑むと朗らかになる方で、亡くなるまでの二年位は呑まなかったのでしょうけれど、その前にはいつも盃を干しながら愉快にお話したものでした／先生は作品がいいときは大変ほめて下さり、悪いときはくそみそに批判して下さったので、評言は大へん励みになったものでした、また先生は「児童文学は純文学ではない、人生に希望の持てない人には書く資格がない」などと、いろいろ教えて頂いたのに、生きておられる内に、よい作品が書けなくて残念で堪りません／私は東京へ行ってもほかの方にはお目にかゝらなくても、吉田先生にだけはお会いすることになっていました､それがこのところしばらくお便りがなく心配で、お見舞に行こうと思っていたとき、このしらせです、無理にも行っておけばよかったと悔まれます　　「吉田先生を憶う…兒童文学の指導者だった…」

高橋は、同記事の中で〈私に限らず、先生のお世話を受けた方はずい分あっ〉[22] たと、甲子太郎の師匠としての一面を語り、〈低い水準にあった児童文学をたかめるべき指導者としての役割を果たしていた方でした〉と称賛している。

筆者は、前方で“有三の存在なくしては、甲子太郎の物書き人生は開花しなかった”と述べたが、これは逆も言えるように思えてならない。甲子太郎のような弟子の存在があったからこそ、今日の山本有三があるとは言えないだろうか。〈山本有三国語読本の編集は殆ど吉田先生がやって〉[23] いた、と高橋も語っている。

弟子としての甲子太郎ばかり目立ってしまっているが、高橋や住井すゑのように、甲子太郎を師と仰いでいた人間が他にもいるはずである。そのルートを辿ることによって、新たな甲子太郎像や甲子太郎作品の解釈に役立つヒントが見えてくると考える。“山本有三のお弟子さん”としての甲子太郎ではなく、そこから離れた甲子太郎単独の姿からは、きっと彼の独自性や新たな発見が見えてくるに違いない。

偉大な師匠のもとで、その影に隠されながらも、直向きに物書き人生を生き抜いた甲子太郎。甲子太郎の存在を、このまま著名人の影に隠しておいてはいけないと思う。甲子太郎に関する研究はあまり進んでおらず[24]、作品の解釈はもちろん、出身地問題や、ペンネーム乱用問題等、解決しなければならない問題が山のように積み上げられている。今回、ここで紹介が認められた吉田甲子太郎関連資料が、ほんの一部分でしかない事が少々心残りだが、甲子太郎の残した書簡を例にとっても、どれも興味深いものばかりである。特に、有三と交わした書簡からは、２人の関係性はもちろん、山本有三一門の様子や、その周辺の様子をうかがい知る事ができる。そして、児童文学関係や国語教育関係、あるいは明治大学関係や馬込文士村関係を探ぐるための、新しい手がかりとしても、これらは重要な資料だと言える。また、甲子太郎以外の視点、例えば有三や他の児童文学者、探偵小説家、馬込文士等の側から見ても、これらの資料は新しい研究対象を見つける一つのカギになるかもしれない。小説家として、翻訳家として、児童文学者として、編集者として、そして教育者としての甲子太郎の姿を、今後も紐解いて行きたいと思う。

今回紹介した資料が、偉人 吉田甲子太郎の名を、改めて世間に伝え広めるきっかけになる事を願う。

【注】

1) 滑川は、甲子太郎の名前の由来を〈甲子（きのえね）の年に生まれたための命名。〉（滑川道夫「児童文学者としての吉田甲子太郎」『日本児童文学大系』第 24 巻「吉田甲子太郎　椋鳩十　林冨美子　田畑修一郎」昭和 53 年 11 月発行　ほるぷ出版）としているが、明治 27 年は“甲午（きのえうま）”である事から、この命名理由は誤りである。
※同論文中、高瀬真理子「d. 吉田甲子太郎についての課題」（「馬込文士村に関わる研究上の諸問題」）にも、同様の話題あり。

2) 神宮輝夫「吉田甲子太郎」『日本近代文学大辞典』第 3 巻（昭和 52 年 12 月 8 日第 2 刷り）

3）　前掲書 1）

4）　前掲書 1）

5）　前掲書 1）

6）　東京説が浮上した理由の一例として、甲子太郎〈自筆の履歴書〉が〈東京都〉からはじめられていること。そして甲子太郎の記憶に、幼少期を過ごしたであろう〈群馬時代の記憶〉がないことがあげられる。馬込文士村資料の中にも、甲子太郎自筆の履歴書（下書き）が存在するが、それをみると本籍について〈東京都京橋区銀座西〉（no.40‐3960）と書かれている。しかし、本籍は動かすことが可能であり、これだけでは決定材料にはならない。この問題に関しては、現在調査中であり、引き続き考察を加える必要があるが、今回は滑川の年譜に記された群馬を出身地として紹介させてもらう。
※同論文中、高瀬真理子「d. 吉田甲子太郎についての課題」（「馬込文士村に関わる研究上の諸問題」）にも、同様の話題あり。

7）　前掲書 1）

8）　前掲書 1）

9）　前掲書 1）

10）前掲書 1）

11）町制施行は、昭和 3 年 1 月 1 日。これにより、馬込村は馬込町へ変更された。この書簡では、甲子太郎の住所が〈馬込村 1000〉となっているが、住所は旧地名のままでも通用する事から、〈3. 9〉を“昭和 3 年 9 月”と解釈した。

12）大田区立郷土博物館資料　吉田甲子太郎葬儀関連資料 no.40-3868

13）滑川は、前掲書 1）の中で、甲子太郎の還暦祝賀会の事にふれ、その際撮影したスナップ写真をもとに、小川未明や坪田譲治等 22 名を参加者として紹介している。祝賀会の様子については、〈主賓の交遊関係の振幅の広さが十分に思われる〉会だったと評し、〈赤ずきんと赤いちゃんちゃんを贈られて、顔をほころばせて、さっそく着用した〉甲子太郎の様子を、〈絵本の花咲爺さんのようなイメージ〉だったと回想している。

14）大田区立郷土博物館資料　吉田甲子太郎葬儀関連資料 no.40‐3783

15）出席予定者名簿にも、当日の出席者名簿にも、尾崎士郎の名前はない。当日は、欠席だった可能性が大きい。又、甲子太郎の師匠である山本有三は、出席予定者名簿に名前はあるものの、〈欠〉の印が付けられ、当日は都合により欠席したようである。

16）大田区立郷土博物館資料　吉田甲子太郎葬儀関連資料 no.40‐3155

17）この日、甲子太郎の娘萌子による長唄「梅の栄」の披露があった。甲子太郎自身も、〈赤いちゃんちゃんの姿で、米川正夫の三味線に合わせて、長唄「くろかみ」〉を披露した。（前掲書 1））

18）弁護士関係は、甲子太郎の実兄吉田三市郎（弁護士）絡みの人脈であろう。田坂は、三市郎と共に東京法律事務所で活躍した人物である。

19）探偵小説家としても活躍。

20）大田区立郷土博物館資料　高橋俊雄書簡（封書）no.40‐3430

21）記事の欄のみ切り取られている為、新聞社名および発行年月日等すべて不明。高橋の住所や記事の内容から、静岡県浜松市周辺の新聞社から発行された記事ではないかと目星をつけ、出所に関して現在調査中。

22）その中に、小説家住井すゑがいた。

23）前掲 21）

24）道徳教育の視点からの研究（例えば「星野くんの二塁打」に対する研究）は行われているようだが、文学の視点かの研究は、ほとんどないと言える。

＊本論文中でふれる吉田甲子太郎年譜資料は、すべて滑川道夫編「吉田甲子太郎年譜」(『日本児童文学大系』第 24 巻／「吉田甲子太郎　椋鳩十　林冨美子　田畑修一郎」昭和 53 年 11 月発行　ほるぷ出版）に拠る。又、山本有三年譜資料は、『山本有三全集』第十二巻（昭和 52 年 5 月発行 新潮社）に拠る。

吉田甲子太郎翻訳関係資料に関する調査報告

祖母井　千　秋
実践女子大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了生

英文学者としての吉田甲子太郎について

英米文学者（翻訳家）としての吉田甲子太郎を調査する上で、遺品資料から、*Marion Obermeyer* が書いた *BARNABY AND HIS PRIZE APPLES* を雑誌資料『月刊トップラーン　心をゆたかにする読み物ワーク』の中で、『バーナビとりんご』というタイトルで、吉田甲子太郎が翻訳をしている事が調査の上で明らかとなった。この二つの資料を比較、検討をする事で、吉田甲子太郎が行った翻訳の校正箇所や誤訳があった事が明らかとなった。

また、遺品や書簡資料などの調査をしていく上で、吉田甲子太郎は生前、英文学作家である *Sherwood Anderson* との交流があった事が明らかとなる。吉田甲子太郎は、シャーウッド・アンダスンの作品のいくつかを翻訳していると共に、書簡のやり取りを繰り返し、交流を深めていた事が明らかとなる。なお、洋書資料からもまた、吉田甲子太郎だけではなく、馬込文士村の主要人物も *Sherwood Anderson* との交流があった事が調査上で明らかとなった。今後 *Sherwood Anderson* と馬込文士村の人物との交流と影響を改めて調査する必要があると考えられえる。

Magazine Servicing

BARNABY AND HIS PRIZE APPLES
バーナビとリンゴ

BY

Marion Obermeyer

マリオン・バマイヤ

（Reprinted from "Story Parade", New York, N.Y., October, 1947）

今年は、リンゴ園が始まって以来の豊作になりそうだ。バーナビ少年の一家は、明日の収かくを前に、幸福なねむりについた。その夜、もうれつな風がふきあれて、リンゴ園は……。
（原文には無い文章のため、吉田甲子太郎の言葉の付け足しだと思われる。）

Barnaby and his father leaned against the old stone fence and filled their eyes with the look of the orchard.
バーナビとかれの父とは古い石がきに寄りかかって、果樹園をひと目に見わたした。

"A bumper crop, a real bumper!" said Father. His pipe sent a brown, toasty smell to Barnaby's nose. "When we get the apples boxed and delivered in Chicago, we'll buy dresses for Mom, paint for the barns, tires for the car, a snow suit for little sister, and – something for you, son"
すばらしい収かくだ。実にすばらしい！」と父が言った。父のパイプがとび色のこうばしいかおりをバーナビの鼻に送ってくる。「リンゴをはこにつめてシカゴへ送り出しさえすれば、お母さんの着物と、な屋を塗るペンキと、自動車のタイヤと、君の妹の冬着と―、それから、君にも何か買ってやれるぞ。」

He put his arm around Barnaby. They sat close together and looked at the sky, blue as Mom's delphiniums. They felt the sun on their shoulders and the back of their necks. They listened to the killdeers calling and the meadowlarks fluting. Barnaby thought, "This is the best Sunday afternoon."
父は片手でバーナビをだいた。二人は体をくっ付けて座り、空をながめた。空はお母さんのさいばいしているヒエンソウのように青い。かれらはかたと首と背筋に日が当たるのを感じた。メリケン・クビワチドリの高鳴きとヒバリムクのさえずりに耳をかたむけた。バーナビは（こんなすばらしい日曜の午後はない。）と思った。

"Well, the pickers will be here tomorrow. Wonder who will be the champion picker this year?" Father remarked.
「あしたは、もぎ手たちがやって来るはずだ。今年はだれが一等賞を取るかな。」と父がつぶやいた。

"I wish I could try for the prize," Barnaby sighed.
「ぼくもその競争の仲間に入りたいな。」バーナビはため息をついた。

“No climbing around on those big ladders until you are a little older,” Father decided.
「もう少し年がいかなければ、あんな大きなはしごには上れないよ。」父ははっきり言い切った。

Barnaby scowled. He was sure he was as nimble-footed as any of the pickers. *Ho longer* to have a try at those enormous apples on the tip-top boughs.
→（校正あり：*He longed* to have …）
バーナビは顔をしかめた。かれは、自分がどのもぎ手にも負けないだけの達者な足の持ち主であることを確信していた。あのてっぺんのえだに、すずなりになっているリンゴをもぎ取ってみたくてたまらなかった。

“We better make sure the packing cases are ready.” Father stood up.
「はこにすぐつめられるようにしたくができているか、調べておくほうがいいな。」父は立ち上がった。

Inside the shed there was a clean, crispy smell from the boxes, barrels and baskets.
物置へ入ると、はこやたるやかごの清らかな、かわいたにおいがただよっていた。

“By next Saturday these will be full of fruit and on their way,” Barnaby said with great satisfaction.
→（誤訳：本来ならば原稿資料通り、土曜日と訳すところが、翻訳では日曜日となっている。）
「来週の日曜日までには、これにみんな果物（くだもの）がつまって、出て行くんですね。」バーナビは、大きな満足の気持ちをこめて、言った。

Father took a last look around. “Everything is shipshape. Let’s go see if supper is ready.”
父は最後の検査をすませた。「これで手落ちなしと。行ってみよう。晩飯（ばんめし）のしたくができてるかもしれない。」

All the way to the back porch, they could look down to where the orchard grew on the long gently sloping hill. They could see how the branches bent with the weight of their beautiful bounty. It was to be the richest harvest they had ever had at Pleasant Valley Apple Farm.
裏（うら）の張り出し座（ざ）しきまで行く間中、かれらは、長くなだらかにけいしゃしたおかに連なる果樹園（かじゅえん）を見下ろすことができた。かれらは、えだえだがその美しいたまもののためにどんなにしなっているかをながめることができた。今年（ことし）はこれまでのプレザント・バリ・リンゴ園の収かくの中での、いちばん豊作になりそうだった。

That night Barnaby and Happiness went to sleep on the same pillow. But only for a short time.
その晩（ばん）は、バーナビと『幸福』とが一つまくらの上でねむりについた。しかし、それもただしばらくの間のことにすぎなかった。

“Stop shaking me!” grumbled Barnaby. He turned over. The shaking started again. Somehow it shook Barnaby into a sitting position. Slowly his eyes opened. His ears woke up, too. Something was shaking the

very house.

「ぼくをゆすぶらないでくれ！」バーナビは不平そうに言った。それから、ね返りをうった。だれかがゆすぶりはじめた。訳のわからぬうちに、バーナビはゆすぶり起こされて、すわりこんでしまった。しだいに目が覚めてきた。耳も聞こえだしてきた。なにかが家全体をゆすぶっているのだ。

A great rushing sound filled the air. The wind! The steady, furious wind!

大きなヒューヒューという音が大気を満たしている。風だ！　むらのないふき方をするもうれつな風だ！

Barnaby stumbled to the window. He looked toward the orchard. There was only blackness. The wind curled itself around the house and shut out all other sounds; but Barnaby knew that out in the orchard the beautiful, the wonderful apples were falling – falling – falling.

バーナビは、よろめきながら、窓の所へ行った。果樹園の方をながめた。真っ暗だ。風は家を取りまいて、ほかの音を全然聞こえなくしている。だが、バーナビは知っていた。果樹園ではあの美しい、みごとなリンゴが後から後から落ちつつあることを。

He drew on his overalls, and went carefully down the back stairs. All the while he was thinking how the friendly wind which tossed his kites and sailed his boats and sent him skimming over the ice had turned into an enemy. Barnaby felt bitter and hurt inside himself, as he did when some boy who had been his friend suddenly began to take sides against him.

かれは、上っぱりを着こんで、手さぐりで裏ばしごを下りて行った。そんなことをしながらも、かれは考えているのだ。自分のたこを上げてくれたり、ボートのほをふくらましてくれたり、氷すべりのときに後ろかふいて、早くすべらせてくれたりした、あの親切な風が、どうして今夜は敵になってしまったのだろうと。バーナビの心はむしゃくしゃしていた。ちょうど、今までみかただった友達が急に敵方についてしまったときみたいな気持ちだった。

Father was sitting by the table. Mother was mending. They were very quiet. Sister slept on the couch near the stove.

お父さんはテーブルに向かってすわっていた。お母さんはつぎ物をしていた。二人ともいたって静かだった。妹はストーブのそばのねいすでねむっていた。

"She was afraid of the roaring," Mother said.

「あの子は風の音をこわがっていたんだよ。」と、お母さんが言った。

"She's so little," Barnaby whispered. "She doesn't know how strong our house is." He put the pink blanket higher around her shoulders.

「まだ小さいんですからね。この家がどんなにじょう夫だかわかっていないんですよ。」かれは、そうつぶやいて、ピンクの毛布を妹のかたの上まで引き上げてやった。

Father smiled at Barnaby, but no one said anything about apples. “We are apple farmers,” thought Barnaby, “and we can’t sleep because we know the wind is banging our trees around.”
父はバーナビにほほえみかけた。だが、だれもリンゴのことについてはなんにも言わなかった。（ぼくらはリンゴを作っている農夫なんだ。）とバーナビは考えた。（だから、風が大事な木をゆすぶり回っているのを知っている間は、ねむることができないのだ。）

He began to hate the wind again. He wanted to go out on the porch and shout at it to stop. He got up.
かれは、また、風がにくらしくなってきた。張り出し座（ざ）しきまで出て行って、ふくのをやめろとどなりたくなった。かれは立ち上がった。

“Never mind, Barnaby. The wind would only shove the words back into your mouth.”
「ほっとけよ、バーナビ。風が君のことばを口のなかへおしもどしてくるだけのことだから。」

Barnaby looked at his father in great surprise. “Why, Dad, how did you know what I wanted to do?”
バーナビはひどくおどろいて父の顔をながめた。「おや、お父（とう）さん、どうして、ぼくのしようと思うことがわかったの？」

Father chuckled. “I wanted to do it, too.” Then his face grew tired and sad. “Some years are good to a farmer, some years are bad. Weather is one of the uncharted seas we have to sail.”
父はのどを鳴らしてわらった。「おれもやっぱり、それをやりたかったからさ。」それから父は、つかれた悲しい顔をした。「農夫にとっては、ある年はいい、そして、ある年は悪いのだよ。おれたちは天候という海図のない海を航海しなきゃならないのさ。」

Barnaby brought the checkerboard and put it between his father and himself. “I’ll take the red,” said Father.
バーナビはチェスばんを持って来て、父と自分との間に置いた。「おれは赤にしよう。」と父が言った。

Barnaby beat easily. It wasn’t any fun. Father’s thoughts were too far away, Barnaby could see. He put away the board. He made some good hot tea.
バーナビは楽々と勝った。ちっともおもしろくない。お父（とう）さんはまるで別のことを考えている。バーナビにはそれがよくわかった。かれはばんをかたづけた。それから、熱いお茶をうまく入れた。

“Barnaby, you’re so handy,” said his mother.
「バーナビ、おまえはほんとに気がきく子だよ。」と、母が言った。

“Feels good, something hot going down,” said Father.
「うまい、熱い物を飲むのはいいな。」と、父が言う。

Barnaby thought the warm tea comforting, too. If only the wind would stop blowing, and there would be light enough to see just a little.

バーナビも温かいお茶を飲むと、心が落ち着くような気がした。ただ、風がふきやんでくれて、外が見えるほどの明るさがあってくれたら、もっといいんだがと思った。

Then suddenly there was light enough. Barnaby raised his head. He found he had been sleeping on his arms against the table top. Through the window the eastern sky was turning faintly pink. Mother slept against the rocker back. Father was snoring a little, slumped in his big chair.

すると、とつ然明るくなった。バーナビは頭を上げた。気が付いてみると、自分はテーブルの上につっぷして、ねむりこんでいたのだった。窓(まど)の外では東の空がほの赤く明けそめていた。母はゆりいすの背(せ)にもたれてねむっていた。父は、いつもの大きないすに落ちこんで、小さないびきをかいている。

Barnaby crept out. All the world was very still. Scarcely a bird had begun to sing. "Even the world is tired after the terrible wind," thought Barnaby. He hurried through the wet, wet grass to the orchard.

バーナビは、そっと外に出た。世界中が静まり返っている。まだ、さえずりはじめている鳥はほとんど一羽(わ)もない。（おそろしい風の後で、世界中がくたびれ切っているのだ。）とバーナビは考えた。かれは、しとどにぬれた草を分けて、果樹園(かじゅえん)へ急いだ。

"So you really are our enemy," said Barnaby out loud. "I hate you, wind!" He sat down on a rock and looked at the empty green trees. He looked at the apples lying all about. Some were broken, some bruised, some almost unhurt.

「なるほど、おまえはぼくらの敵だ。」バーナビは口に出して言った。「きさまをにくんでやるぞ、風め！」かれは岩の上にすわって、むなしくなった緑の木々をながめた。辺りに散乱(さんらん)しているリンゴをながめた。われているのもある。傷(きず)がついているのもある。ほとんど無傷(むきず)のもある。

"Windfalls! Nobody can ship windfalls!" He felt a big sob roll right over him, and then he was crying very hard.

「風落ちリンゴだ！　風落ちリンゴを送り出すわけにはいかないのだ。」かれは、すすり泣(な)きが全身におそいかかるのを感じた。それからかれは、はげしくなきつづけた。

"I'm eleven," Barnaby told himself angrily. "I won't cry. Not for the best apples in the United States." He washed his eyes and face with dew. When he looked up, Father was standing beside him.

「ぼくは十一だ。」バーナビは、腹立(はらだ)たしげに自分に言い聞かせた。「ぼくはなかないぞ。合衆国(がっしゅうこく)一のリンゴのためにだってなくものか。」かれは目と顔をつゆであらった。顔を上げると、かたわらに父が立っていた。

“One of the bad years,” said Father. Barnaby could hear how he tried to make his voice brisk. “Next year we'll do better. We'll have to get word to the pickers, so they won't make the useless trip out here. The radio says Pearl Valley escaped the wind, so they can go right on up there to harvest. I'll have to telegraph the warehouse at Chicago, too.”

「今年は悪い年なんだ。」と父が言った。バーナビには、お父さんが努めて元気な声を出そうとしていることがわかった。「来年はもっとうまくやろう。もぎ手たちのところへ知らせなければならない。ここまでむだ足をさせては気の毒だからな。ラジオで聞くと、パール・バリの果樹園は助かったということだ。だから、みんなはまっすぐあっちへ行けばいいんだ。おれはシカゴの問屋へも電報をうたなきゃなるまい。」

“Guess so,” said Barnaby kicking the grass so the dew sprayed around. He did not look up at his father. “Going to sell these?”

「そうですね。」バーナビが言いながら草をけると、つゆが辺りへ飛び散った。「このリンゴ、売るんでしょう。」

“Windfalls?” scoffed Father. “Can't get anything for windfalls. Take six men to pick them up, and then they wouldn't bring a decent price. They're not good for much but applesauce. If folks want to pick them up, they can have them.”

「風落ちリンゴをかい。」父はばかにしたような声を出した。「風落ちじゃ一文にもならないよ。拾い集めるのに六人分手間をかけるとするね、そうなると手間賃もでないのだ。アップルソースでも作るほか役に立たないのだからね。拾いたいっていう人があれば、ただであげることにするんだね。」

On the way back to breakfast they made a wide circle around the shed where the good-smelling boxes and barrels stood waiting.

朝食を食べに帰ると中、二人は大回りをして、いいにおいのするはこやたるが人待ち顔をしているあの物置小屋のそばを通ってみた。

Father went off after breakfast. Barnaby went back to the orchard. He was planning. He picked up an apple. It scarcely showed a bruise, yet Barnaby knew any fallen apple is hurt. At any time it might start to spoil. He picked up one apple after another, and found a great number of almost perfect ones.

父は朝食をすませると出て行った。バーナビは果樹園へもどって行った。かれはあることを計画しているのだった。まず、リンゴを一つ拾ってみた。ほとんど傷は見えない。だが、バーナビは落ちたリンゴは必ずいたんでいるものだということを知っていた。いつくさりだすかわからないのだ。かれは、次々にリンゴを拾ってみた。すると、ほとんど無傷のものがたくさんあることがわかった。

“Maybe I can't pick apples, but I can pick them up,” Barnaby decided firmly.

「ぼくには、リンゴをもぐことはできないかもしれない。だが、拾うことはできるんだ。」バーナビは固く決心した。

He ran to the shed and came back with bushel baskets. He sorted as he picked up, faster, faster, basket, after basket. His back began to ache.

かれは物置小屋へ走って行って、一ブッシェル（約三十五リットル。）入りのかごをいくつか持って来た。かれは拾い上げるにしたがってえり分けた。だんだんに速度を早めて、いくかごも、いくかごも。背中がいたくなってきた。

When he stood up, he could see Mom. She waved and called, "I fed the chickens, Barnaby."

立ち上がると、お母さんの姿が見えた。かの女は手をふって、遠くから話しかけた。「ニワトリにえさをやっておいてあげたよ、バーナビ。」

"Thanks, Mom." He worked on. Apples lay about him by the bushel. It was almost like trying to scoop up the lake with a cup.

「ありがとう、お母さん。」かれは働きつづけた。リンゴは何ブッシェルとなく、かれの周りに散らばっている。まるで湖の水をコップですくい出そうとしているようなものだ。

Noon came. So did Father. Barnaby found him packing.

正午になった。父が帰って来た。バーナビは父が旅行かばんに荷をつめているのを見た。

"Hello, son. I met Dick Chalmers in town. He asked me to come down to Pearl Valley to help direct the packing and shipping. It will give us a little ready cash. Do what you think best about windfalls, Barnaby. I'll be gone all week."

「やあ、バーナビ。町でディック＝チャルマズに会ったんだ。そしたら、パール・バリへ来てリンゴの荷造りと積み出しの指図をしてくれないかっていうんだ。そいつをやればいくらかの現金が手に入るからな。風落ちリンゴは、君がいいようにしておくれ。おれは、まる一週間は帰らないからね。」

Barnaby said nothing about the heaping baskets in the orchard.

バーナビは果樹園に積んであるかごのことは、なんにも言わなかった。

Father and the car had scarcely disappeared before he was back at work. His back ached. His arms ached. His eyes ached. Mom came out to help when she could, but mostly he worked alone.

父の乗った自動車が見えなくなるかならないかに、かれはまた仕事にかかっていた。背中がいたい。うでがいたい。目がいたむ。お母さんが、自分の手すきには手伝ってくれた。しかし、たいていは、かれは一人で働いた。

Tuesday! Barnaby seemed to hear the clock ticking, "Apples, apples, apples!"

火曜日！　バーナビは時計が、「リンゴだ、リンゴだ！」と時をきざんでいるように思われた。

Wednesday! "Pick-up, pick-up, pick-up," it seemed to tick.

水曜日！　「拾え、拾え、拾え。」時計の音がそう聞こえた。

Thursday! “Getting there, getting there, getting there,” Barnaby heard.
木曜日！　「もう少し、もう少し、もう少し。」とバーナビには聞こえた。

On Friday Barnaby was ready to go to town with his wares. He hitched the big brown horses to the wagon and started off. Mom and little sister went along.
金曜日には、バーナビは商品を持ってまちへ出かける準備ができていた。かれは荷馬車に大きなとび色の馬をつけて出発した。母と妹とが付いて行った。

“It will take a long time to haul them all,” said Barnaby. “We could take orders. And we can ask people if they’d like to come out and pick up their own apples.”
「あれだけのリンゴをみんなで運び出すのには、ずいぶん時間がかかるよ。でも注文を取ることだってできるし、来て自分でリンゴを拾うようにたのむことだってできるからね。」バーナビはそう言った。

“If you do as well at selling as at picking up, you’ll salvage something for Father. I wish he could see you working,” Mom answered.
「拾ったときのように、売ることもりっぱにやってのければ、いくらかお父さんをお助けすることができますよ。おまえが働いているところをお父さんに見せたいものだね。」お母さんはそう答えた。

In the town of Pleasant Valley folks were surprised and delighted to see the wagon brimming with the apples from the big farm in the valley.
プレザント・バリの町では、自分たちの土地の大きな農場でできたリンゴを満さいした馬車を見て、町の人たちはびっくりもし、喜びもした。

“Pleasant Valley apples? Of course I want some,” the housewives said.
「プレザント・バリのリンゴですって？　そりゃあいただきますとも。」と、お母さんたちは言った。

“Pleasant Valley apples? Yes, sir, I’ll take a couple of bushels,” the men, homeward bound, would declare.
「プレザント・バリのリンゴだと？　もらうとも、二ブッシェルばかりくれたまえ。」うちへ帰ると中の男の人たちも大声で言うのだった。

“Sorry about the wind, folks, but it is nice to get some of those fine apples of yours,” others said.
「大風で気の毒だったね。だが、こんなみごとなリンゴが買えるのはありがたいな。」そんなふうに言う人もあった。

Mr. Jasen ran out of his store. “Give me twenty-five bushels, Barnaby. I can sell them easily enough.”
ジャンセンさんは店からかけだして来た。「二十五ブッシェルもらおう。なあに、すぐ売れちまうさ。」

Barnaby had fun giving them to the kids to taste. He had wished at other times he could do that, but the apples had always been boxed, ready to be put on the train.
バーナビは、おもしろ半分、子どもたちにリンゴを食べさせてやった。かれは、前にもそうしたいと思ったことがあったのだが、リンゴは汽車に積みこむために、いつもきちんとはこづめになっていた。

"The wagon's empty, Mom. Let's go home for another load," he said at last.
「馬車は空っぽです、お母(かあ)さん。うちへ帰って、また積んで来ましょう。」かれは、とうとうそう言った。

That evening, Barnaby and his mother put the money in a little apple barrel under the couch.
その晩(ばん)、バーナビと母とは、ねいすの下の小さなリンゴだるの中にお金をしまった。

"A good day, good day, good day," the clock seemed to tick.
「いい日だ、いい日だ、いい日だ。」時計(とけい)はそう言って、時をきざむように思えた。

Barnaby was hard at work the next morning when he saw a huge truck stop beside the fence; the driver came across the field. Barnaby felt troubled before the man spoke a word.
明くる朝、バーナビが一生けん命に働いていると、大きなトラックがかき根の所へ来て止まった。運転手が畑を横切って、こっちへやって来る。その人が口を開かないうちから、バーナビはこまったなと思った。

"Where's your pa, kid?"
「お父(とう)さんはどこだね、ぼうや。」

"He's not here," said Barnaby, still picking up.
「ここにはいないよ。」言いながら、バーナビはかまわずリンゴを拾いつづけた。

"Selling those apples?"
「そのリンゴ、売るんだろう。」

"Yes, sir."
「ええ、そうです。」

"How much?"
「いくらだね。」

"For whatever I can get," Barnaby answered. "They're windfalls."
「いくらってことないんです。風落ちリンゴですから。」バーナビは答えた。

“Some of ?em are pretty nice. I’ll take the lot of ?em. Give you a fair price.” The truck driver *names* a generous sum.

→（原稿の文字が消えているため、文字を読み取る事が不可能。しかし、翻訳から判断する限り、“?em” は apples を示す them ではないかと考えられる。*names* の部分が校正され *named* に変わっている。）

「ちゃんと立派なやつもあるじゃないか。うんと買うぜ。相当な値をはらうよ。」そこで、トラック運転手はかなりいい値段を付けた。

“Where are you going with them?” asked Barnaby, twisting an apple round and round.

「どこへ持って行くんですか。」バーナビはリンゴを一つ、くるくるひねくり回しながらたずねた。

“Chicago.”

「シカゴだよ。」

“I’m selling in Pleasant Valley this year,” Barnaby explained.

「今年はプレザント・バリで売るつもりなんです。」バーナビは思ってるとおりのことを言った。

“Shucks, I’ve made you a good offer. Go tell your ma.”

「ばかな、いい値で買うって言ってるんじゃないか。行って、お母さんにそう言えよ。」

“I－I’m in charge of the apples. Dad said I should do what I thought best.”

「ぼ、ぼくがリンゴを預かっているんです。君のいいようにしろって、お父さんが言ったんです。」

“Well, he’ll sure be mad if you turn down this offer. Better think again. I’m not going to stick around. Not many folks willing to buy windfalls.”

「だがね、君がおれの申し込みを断ったりすりゃ、お父さんは気ちがいのようになっておこるぜ。考え直すんだな。おれのほうはどうでもいいんだけど。風落ちリンゴを買いたがる人間なんてあんまりないからな。」

Mom came down the hill. The truck driver repeated his offer.

お母さんがおかを下って来た。運転手はいい値をくり返した。

“The kid ain’t old enough to decide,” he said scornfully. “That’s the best bargain you’ll get, ma’am.”

「こんな小さな子どもじゃ話はわからないよ。」と、かれはあざけるように言った。「これくらい割のいい商売はありゃしませんよ、おくさん。」

Barnaby looked at Mom. She smiled back at him.

バーナビはお母さんを見た。かの女はかれにほほえみ返した。

“Barnaby’s in charge of the orchard,” she said.

「リンゴはバーナビが預かっているんです。」と、かの女は言った。

It was a good offer, Barnaby knew. Maybe it was more than they would get out of trucking them off to town. Less work, too. Dad needed the money. But – the folks in pleasant Valley Town had been so tickled to get the apples.
それがいい値段のことは、バーナビにもわかっていた。きっと、町まで運び出して売るよりはもうかることだろう。それに仕事も楽だった。お父さんはお金がいるのだ。しかし……、プレザント・バリの町の人たちはリンゴが買えるのであんなに喜んでいるではないか。

Barnaby remembered the hospital and the children's home. He and Mom had put the very lowest price they could on those orders.
かれは病院とたく児所のことを思い出した。かれとお母さんは、そこからの注文はできるだけ安い値段に決めてきていたのだった。

He almost wished Mom would decide. She only looked at him, and trusted him.
かれはお母さんが話をつけてくれればいいと思うくらいだった。だが、お母さんはかれを見ているだけで、かれに任せ切っていた。

"I'm sorry," Barnaby said at last. "The folks in our town want them. I guess we'll sell them there."
「お気の毒ですが、」と、バーナビはついに言った。「ぼくの町の人たちがほしがっているのです。町で売ることにしたいと思います。」

The driver shrugged. "Come time to count your cash you'll be sorry." Barnaby's heart beat fast, but he picked up a small basket of apples and handed them to the driver.
運転手はかたをそびやかした。「売り上げをかん定するときになって、くやしがることになるぜ。」バーナビの心臓は、打ち方が早くなった。だが、かれはリンゴの入った小さなかごを取り上げて、それを運転手に差し出した。

"I hope not," he said. "Thank you for the offer, though."
「くやしがったりはしたくないと思います。でも、いい値段で買おうと言ってくだすってありがとう。」そう、かれは言った。

The man was pleased with Barnaby's gift. He bit into one of the reddest apples. "M-m-m, good. Wish you'd change your mind."
相手の男はバーナビのおくり物を喜んだ。いちばん赤いリンゴにかじり付いた。「うむ、うまい。考え直してくれりゃいいのにな。」

Barnaby shook his head.
バーナビは頭をふった。

"Well, good luck then, boy. So long!"
「そうか、じゃ、うまくやれよ。さようなら！」

“So long,” called Barnaby. He worked harder, faster. He wanted to run after the driver before he climbed into the truck.

「さようなら。」バーナビも大きな声で言った。かれは、今までよりも一生けん命に、手早く働いた。かれは、運転手がトラックに乗りこまないうちに、そのあとを追いかけたいような気がした。

“It’s sort of a big responsibility,” “Maybe. . . . . Now look, Barnaby,” he told himself as though he were Father talking to Barnaby, “you’ve decided what to do. Stick to your guns.”

「いわば、これは大きな責任のようなものだ。」「おそらく……、いいか、バーナビ、」かれは、お父さんがバーナビに話をしているような具合に、自分に言い聞かせた。「君は自分でしようと思うことを決めたのだ。自分の持ち場をしっかり守るんだぞ。」

Barnaby got most of his apples in to town. The best ones. The little bank was packed now. Mom stayed at home and tended to the folks who offered to drive out and get their own fruit.

バーナビは自分のリンゴの大部分を町へ持って行った、いちばんいいやつを。小さなお金入れはもういっぱいになった。母はうちに残って、リンゴを自分で拾いにやって来る人たちの世話をした。

People said to Barnaby, “Wish your father would save part of his apple crops for Pleasant Valley. We appreciate good fruit, too. We’re willing to pay just as good a price for it as *fooks* in the big cities.

→（校正あり。*fooks* の部分が校正され、*folks* になっている。）

人々はバーナビに言った。「あんたのお父さんが、リンゴの収かくをいくらかプレザント・バリのために残しておいてくれるといいんだがね。あたしたちにだって上等な果物はありがたいんだよ。大きな都会の人たちと同じ値段で喜んで買うのに。」

“I’ll speak to Dad about it,” Barnaby promised.

「そのことはお父さんに話しておきます。」バーナビは約そくした。

“You do that, Barnaby,” said the Mayor of Pleasant Valley. “You’ve a good business head on you.” Barnaby blushed.

「ぜひ話しておいてくれ、バーナビ。」と、プレザント・バリの町長が言った。「君は商人としてなかなかいい頭をしているよ。」バーナビは赤い顔をした。

Sunday evening Father came home. He found Barnaby and Mom counting silver and greenbacks on the kitchen table.

日曜日の晩は父が帰って来た。彼はバーナビと母とが台所のテーブルで、銀貨や紙へいを数えているのを見た。

“What’s this? You found treasure in the pasture?” he grinned. He looked very tired.

「これはどうしたということだ？　まき場から宝物でもほり出したのかね。」かれは変なわらい方をした。大変つかれている様子だった。

“No,” Barnaby chuckled. “We salvaged some treasure from the orchard, though. We sold out to Pleasant Valley Town.”

「ちがいます。」バーナビはうれしそうにわらった。「果樹園から、ちっとばかり宝物を助けだしたんです。プレザント・バリの町へ売り出したんですよ。」

“All that – for windfalls?” Dad's face brightened. “Why, I can't believe it. How did you get them all picked up and to town?”

「それがみんな……、風落ちリンゴの代金かい。」父親の顔はかがやいた。「ふうん、信じられないな。どうやって拾い集めたんだ。どうやって町へ運んだんだ。」

“Barnaby,” Mom began.

「バーナビですよ。」母が口を切った。

“No, Mom,” protested Barnaby.

「ちがいます。お母さんです。」バーナビが言い立てた。

“Barnaby,” said his mom firmly, “set out to help his *bad*. This has been the busiest week this apple farm ever had.”

→（校正あり。*bad* の部分が校正され *Dad* になっている。）

「バーナビが、お父さんの手助けに乗りだしたんです。」お母さんが強く言い切った。「このリンゴ園が始まってから、今週ほどいそがしい一週間はありませんでした。」

“Son, I'm so proud of *you* my coat buttons are liable to pop,” said Father. “Any little favor I can do for you?”

→（校正あり。*you* の部分が校正され、*you,* になっている。）

「えらいぞ、せがれ、おれは鼻が高い。どんなほう美をあげたらいいかな。」

He settled back with his arm around Barnaby. The brown, toasty smell of his pipe filled the room.

父はバーナビの体に片手をまき付けたまま、いすに身をしずめた。かれのパイプのとび色のこうばしいかおりが、部屋を満たした。

“Well, Dad, you've always given a prize for the best picker,” Barnaby began hesitantly.

「ねえ、お父さん、お父さんは毎年、いちばんたくさんもいだもぎ手に賞品を出すんでしょう。」バーナビがためらいがちに言いだした。

“Yes,” said Father, talking the sentence out of Barnaby's mouth and putting it into his own, “and now I'm offering a prize for the best picker-upper.”

「うん。」父はバーナビの口からことばを引き出して、それを今度は自分の口で言い直すような調子で、言った。「そこで、おれは今、いちばんえらい拾い手にほう美を出そうとしているところなのさ。」

“That’s me,” grinned Barnaby.

「それはぼくです。」バーナビが、にやっとわらった。

“That’s you,” agreed Dad.

「それは君だ。」と、父は賛成した。

“I – I’d like to do business with you next year, Dad. I’d like to contract for some apples for pleasant Valley Town. I sort of opened a wedge for the trade. I gave folks a sample of our wares, and they liked them fine. They said they would pay as good prices as city folk.”

「ぼ、ぼくは来年ほう美をもらいたいんです。プレザント・バリの町のために、リンゴを少しけい約しておきたいと思うんです。この取り引きは、ぼくが道をつけたようなものですからね。ぼくが町の人たちにうちの商品の見本をわたして、大変気に入られたわけでしょう。みんな、都会の人たちと同じ値段を出すって言ってるんですよ。」

“Why, Barnaby,” Father looked at him in astonishment. “That’s a splendid idea. A home market! I could sell them a little more cheaply in Pleasant Valley. There would be no expensive packing and shipping. A good friendly deal, too! Pleasant Valley apples for Pleasant Valley folk. Barnaby, it’s a deal! Shake!”

→（誤訳：本来ならば資料通りに「なんだって、バーナビ」父は驚いて彼を見た。などの訳をいれるべき場所だが入っていない。）

「そうか、そいつはとてもすばらしい思いつきだ。土地で買い手が付くんだからな！　プレザント・バリでならちっとは安くしてもいいよ。荷造り賃だの送料がかからないものな。それに近しい人たちとの取り引きだからね。プレザント・バリのリンゴをプレザント・バリの人たちへか。バーナビ、こいつはゆ快な商売だ！　あく手をしよう。」

“Oh boy! Thanks, Dad, thanks!”

「お父さん、ありがとう、ありがとう。」

Barnaby felt pretty good with his hand grasping Dad’s big warm one. But now he was tired – tired. Every thought slipped away but the thought of sinking down in his bed. Oh, how his muscles ached!

バーナビは、お父さんの温かい大きな手をにぎって、とてもいい気持ちだった。だが、かれはもう、つかれた、つかれた。自分のねどこへもぐりこみたいということのほかはなんにも考えられなくなった。ああ、なんて節々がいたいのだろう！

“Guess I’ll go up now,” he mumbled sleepily. “Good night, Mom and Dad.”

「二階へ行きますよ。」かれはねむそうに、口の中でもぐもぐと言った。「お父さん、お母さん、お休みなさい。」

Suddenly Barnaby came bounding down the steps. “Mom, oh Mom!”

とつぜん、バーナビは階段を飛び下りて来た。「お母さん、お母さん！」

"Why, son what is it?" Mom hurried to his anxiously.

「まあ、どうしたというのさ。」母は心配そうに、かれの所へかけ寄った。

"Mom, we didn't save an apple to eat!" Barnaby moaned.

「お母(かあ)さん、ぼくたち、自分の食べるリンゴを一つも取っとかなかったんでしょう。」バーナビはうめくように言った。

"Why, Barnaby, I didn't think you would want to look at another apple this season. But if you really want one. . . . ." Mom opened the door to the lean-to. Ten beautiful bushels shone in the half darkness.

「なんだね、バーナビ、今年(ことし)はもうリンゴを見るのもいやなんだろうと思っていたのにさ。でも、ほんとにほしいのなら……。」お母(かあ)さんは戸だなを開けて見せた。十ブッシェルの美しいリンゴがうす暗い中に照りかがやいていた。

"Oh, Mom!" Barnaby blissfully bit into the biggest apple he could find. "I forgot all about eating any this week."

「おお、お母(かあ)さん！」バーナビは目につくうちでいちばん大きなリンゴにうれしそうにかぶり付いた。「ぼく、一週間中、リンゴを食べることをすっかりわすれていたんです。」

－ The End －

付記：博物館資料

(1) 遺品資料№. 2050　*BARNABY AND HIS PRIZE APPLES*『バーナビとりんご』
は、雑誌資料№. 2585・2586『月刊トップラーン　心をゆたかにする読み物ワーク』の中に入っている、吉田甲子太郎の翻訳原稿と一致する。
原稿と雑誌資料『月刊トップラーン　心をゆたかにする読み物ワーク』の翻訳を参考に、目に見えた誤訳と校正を調べたものになる。詳細に調べる限り、文章の中には誤訳が多い。

(2) 書簡資料№. 3811 吉田甲子太郎宛　池田福馬書簡や雑誌切抜き資料№. 2937『シャーウッドアンダスンと私』の中に吉田甲子太郎の翻訳した『卵の勝利』の事が書かれている。
以下は、手持ち資料の中から『卵の勝利』について明らかにしたものである。
吉田甲子太郎訳『海外文学新選』第十五編『卵の勝利』　東京、新潮社、1924 年。

(3) 洋書資料№. 2317 の *Twentieth Century Literature* の文書の中に、吉田甲子太郎など馬込文士村の住人の名前が出てくる。
以下の資料は、作品に関連した手持ち資料であり、*Twentieth Century Literature* に書かれている書面の一部が作品中にある。
大橋吉之輔『アンダスンと三人の日本人』　東京、研究社、1984 年。
その他にも、雑誌切抜き資料№. 2932 に出てくる、「シャーウッド・アンダスン覚書」は、中にも、吉田甲子太郎や尾崎士郎などの馬込文士村の住人が登場する。
以下は、手持ち資料の中から、『S・アンダスン覚書』について明らかにしたものである。
小林祐二『S・アンダスン覚書』　東京、開隆堂、1988 年。となる。